

第3章

教育プログラムの評価 実施後のアンケート調査と分析

英語教員研修 e ポートフォリオ開発検討委員会による意識調査

第 1 節 調査の概要

今回の調査研究事業の成果を検証するため、ならびに意見等を広く聴取するため、以下の調査を実施した。

アンケート調査 「英語教員研修 e ポートフォリオ開発検討委員会による意識調査」

①調査対象

○英語教育について、研修する第 3 回目研修に出席した教員、ならびに認定講習に出席した教員

②実施方法及び実施時期

○実施方法

第 3 回目の研修終了後、ならびに認定講習終了後に、質問紙調査法で実施した。e ポートフォリオと区別するため、紙ベースで行った。

○回収数

29 件の回答を得た。

○データ・スクリーニング

すべての回答結果 29 件のうち、自由記述の空欄を除き、欠損値を含むデータは 4 件であった。通常であれば、欠損値を含むデータはリストワイズで除外するのが通例であるが、今回はデータ数との兼ね合いもあり、除外はせず、該当する質問項目に関して、「空白・エラー」の項目を設け、分析対象データに残しておくこととした。

○実施時期

令和元年 11 月から 12 月上旬まで

○調査内容

事前に、山形市内の教員に、簡単なフォーカス・グループ・インタビューを実施した。その結果をもとに、現場の教員が関心や問題意識を持っていると考えられる事柄を推測し、仮説を立てた。そして、それを基に 12 の質問項目を作成した。一方、調査者が想定していない事柄を現場の教員が持っている可能性があり、それを探るために、1 つの自由記述を設定した。

③ 分析方法

・質問項目 1 から 12 までの定量的調査については、すべての質問項目に関して「単純集計」を行い、それから任意の質問項目について「クロス集計」を

行った。各クロス表は、標本数ならびに各マスの度数を考慮し、コクラン・ルールにより、カイ二乗検定を行わず、フィッシャーの正確確率検定 (Fisher's exact test) を行った。ソフトウェアは「R」(RStudio Version 1.2.1335)を用いた。ソフトウェアは「R」(RStudio Version 1.2.1335)を用いた。

・質問項目 13 は自由記述であるが、定性的調査・質的調査については、テキストマイニング（多変量解析に基づく計量テキスト分析）を行った。

アンケートの自由記述を分析する場合、これまでは、コーディングを施するのが通例であった。しかし、その際、分析者の恣意もしくは主観的な要素が混入してしまうことを避けることは難しかった。それゆえ、客観性を担保するため、**テキストマイニングすなわち計量テキスト分析の統計的手法**を用いることとした。

具体的には、日本語テキスト型データを分析するためのツールとして、社会調査などで広く用いられている「KH Coder」(Version: 3. Alpha. 17g)を使った。KH Coder とは、「テキスト型（文章型）データを統計的に分析するためのフリーソフトウェア」であり、「アンケートの自由記述・インタビュー記録・新聞記事など、さまざまな社会調査データを分析するために制作」されたものである（樋口耕一「KH Coder」<http://kncoder.net>）。

第2節 調査結果 傾向と分析

1. 現在勤務している学校の校種を答えて下さい。 図 10.

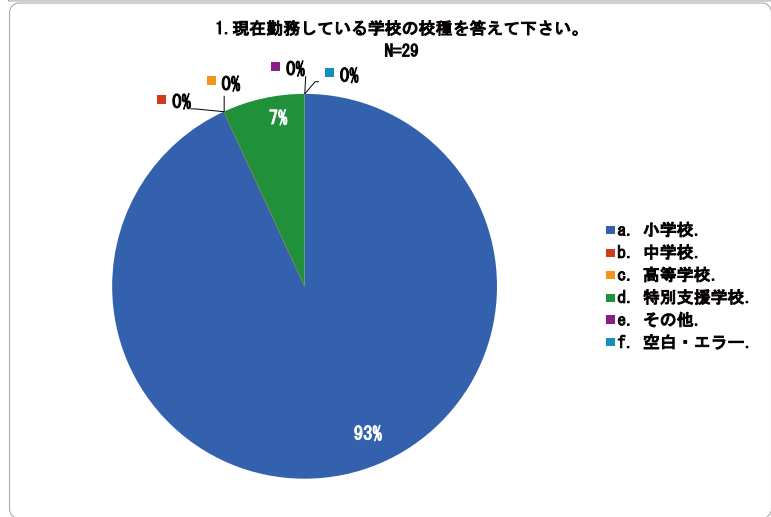
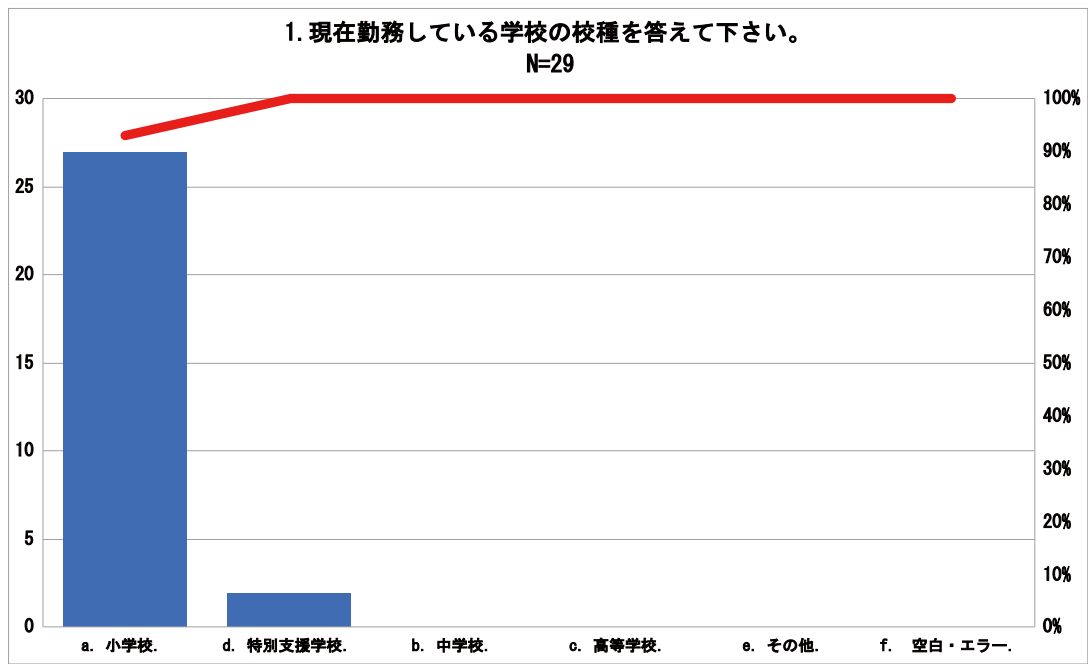


表 2.

a. 小学校	27	93 %
b. 中学校	0	0 %
c. 高等学校	0	0 %
d. 特別支援学校	2	7 %
e. その他	0	0 %
f. 空白・エラー	0	0 %
計	29	100 %

図 11.

傾向

校種別では、小学校に勤務する教員が 93%であり、特別支援学校の教員が残りの 7%を占めている。

分析

基本的には、今回の取り組みは、公開の研修会であり、小学校・中学校・高等学校の教員を対象としているが、このアンケートを実施した第3回目の研修会と認定講習は、小学校の教員が多かったゆえ、上記の結果となったものと思われる。

2. 年齢を答えて下さい。 図 12.

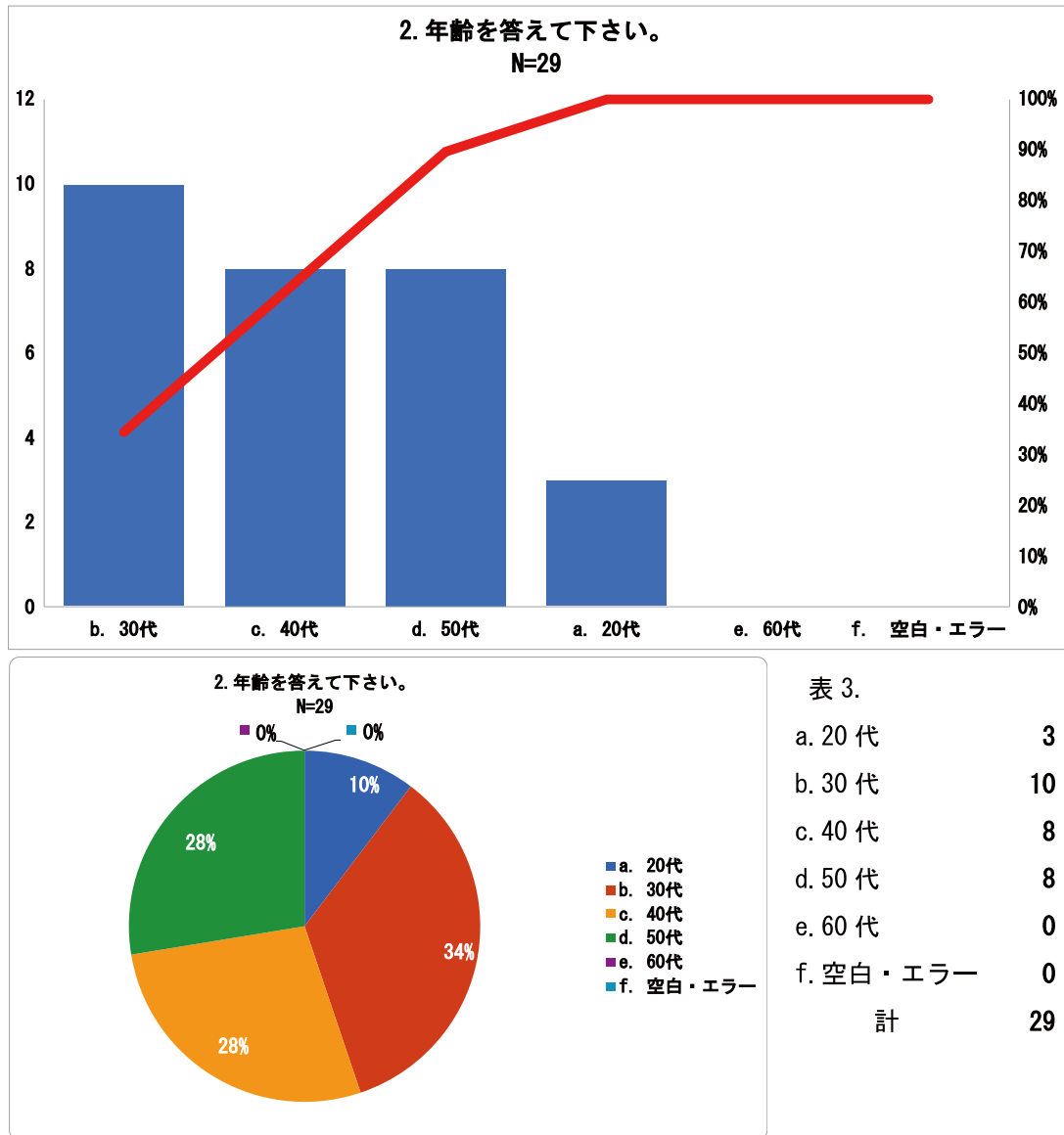


図 13.

傾向

世代別では、30 代・40 代・50 代の「ベテラン」世代からの回答が 9 割を占めており、残り 1 割が 20 代の教員となっている。20 代の教員が他年代に比べ少し薄くなっている。

分析

山形県が第 6 次教育振興計画で公表している、教員の年齢層比率とほぼ同様の傾向となっている(第 6 次教育振興計画 P. 67)。教育現場での年齢比率がそのまま回答結果に表れた形になっていると考えられる。また、管理職・学年主任が代表として回答を寄せている可能性もあるように思われる。

第 6 次山形県教育振興計画

https://www.pref.yamagata.jp/ou/kyoiku/700001/rokkuyoushin/7b2c66b215c715f62770c655980b2632f82088a08753b_518a5b50-51684f53.pdf

3. 明日の授業に、すぐ使える実践的テクニックを学べる研修が望ましい。図 14.

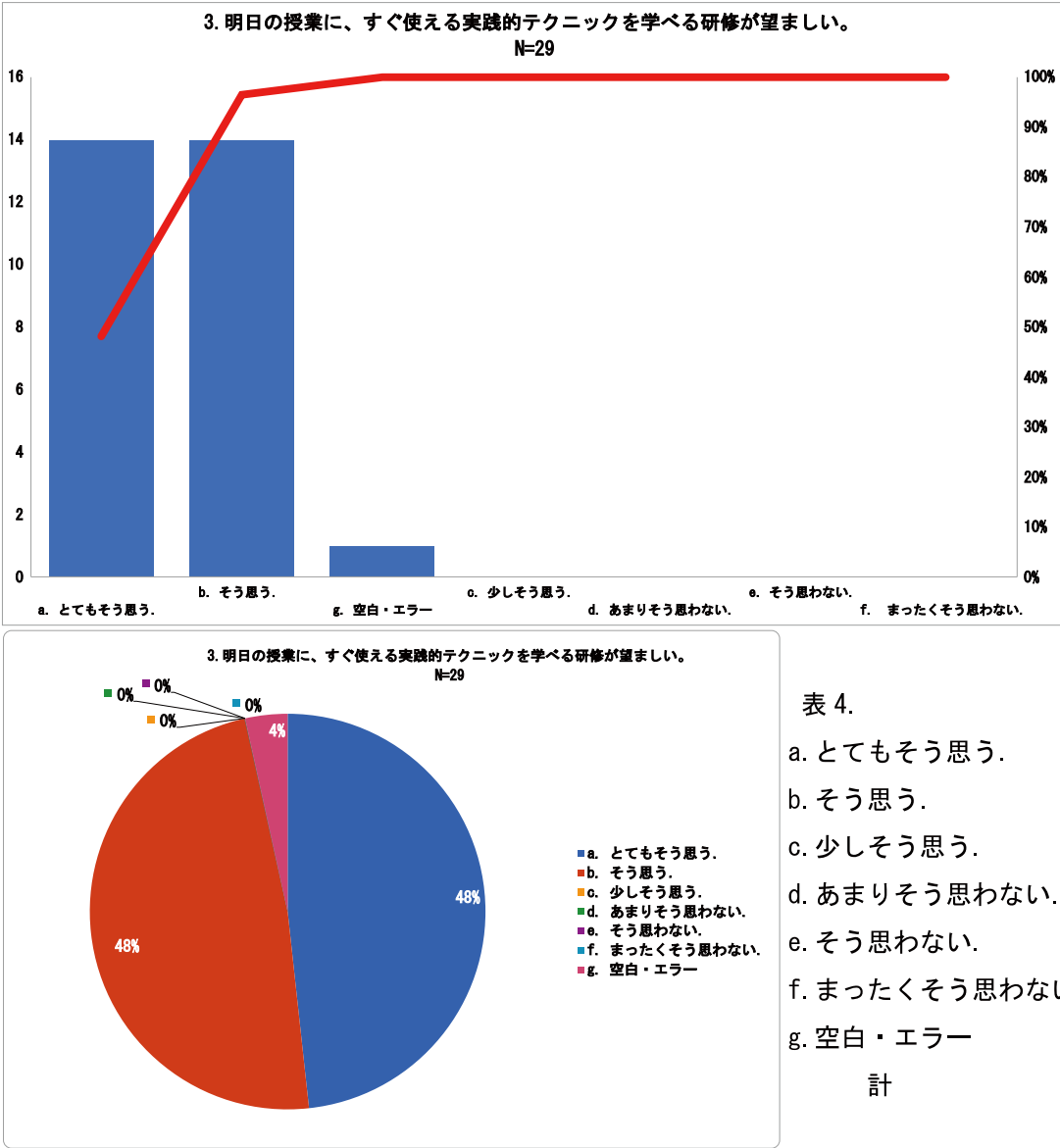


図 15.

傾向

「ともそう思う」「そう思う」がそれぞれ全体の半数を占めている。

分析

明日の授業に、すぐ使える実践的テクニックを学べる研修が望ましいと捉えている教員がほぼ 100%を占めていることから、これまでの実践の少なさや専門性の低さを不安に感じていることが想像できる。小学校における外国語活動、英語の授業について、児童の意欲を喚起することができるような授業実践をしたいと考えている教員がほとんどであると考えられる。

4. 座学よりも、授業参観やワークショップなどの研修が望ましい。 図 16.

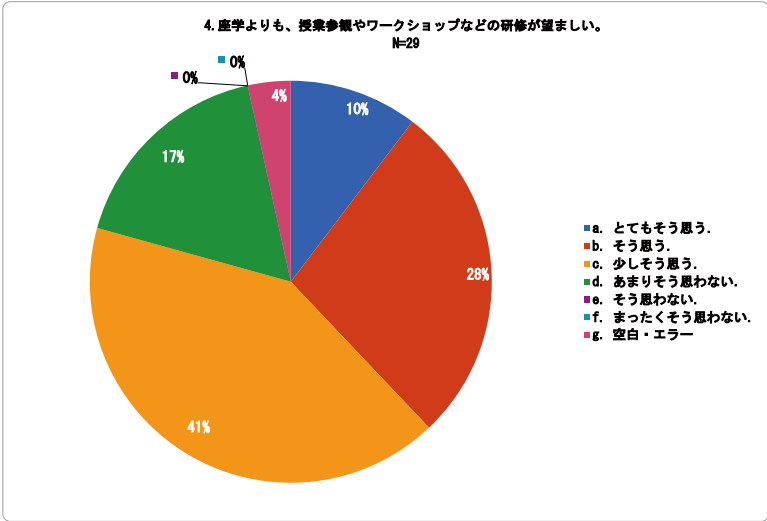
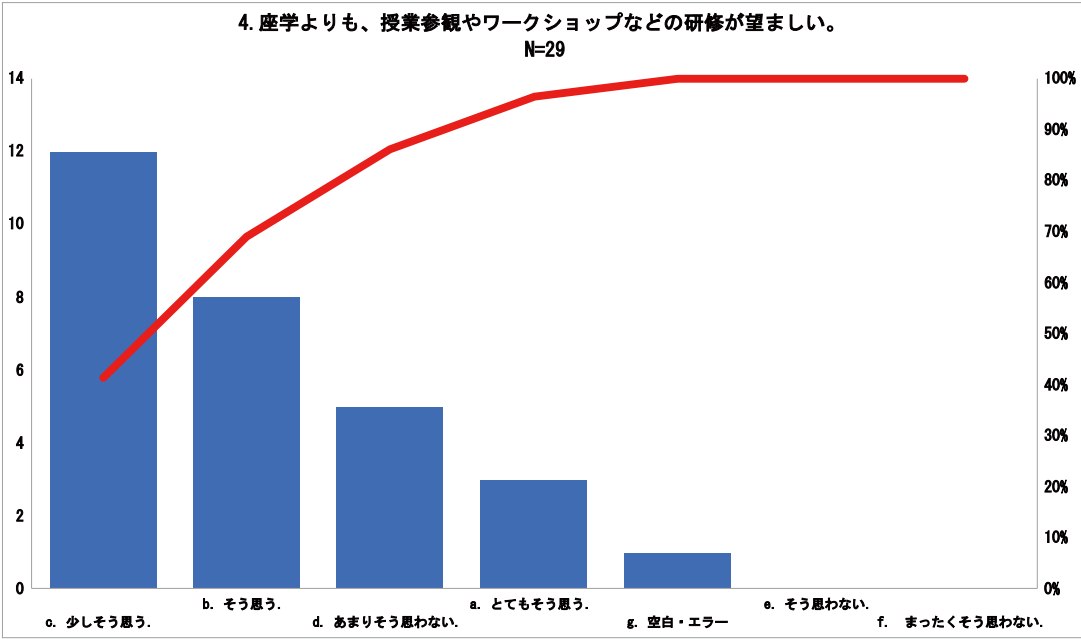


表 5.

a. とてもそう思う.	3	10%
b. そう思う.	8	28%
c. 少しそう思う.	12	41%
d. あまりそう思わない.	5	17%
e. そう思わない.	0	0%
f. まったくそう思わない.	0	0%
g. 空白・エラー	1	4%
計	29	100%

図 17.

傾向

「とてもそう思う」「そう思う」「少しそう思う」が全体のおよそ 8 割を占めており、「あまりそう思わない」が、全体の約 2 割弱になっている。

分析

授業参観やワークショップなどを通して、明日の授業で使えるメソッドを学びたいと考えている教員が多く、具体的な授業のイメージ（教師の動きや児童の発言の様子など）を捉えたいと考えている教員が多いことがわかる。一方で、約 2 割の教員がその実践を支える理論について知りたいと考えていることがわかる。

5. 新学習指導要領が実施されるにあたり、指導案の書き方、CAN-DO リストの作成、活用の仕方、評価方法を学べる研修が望ましい。図 18.

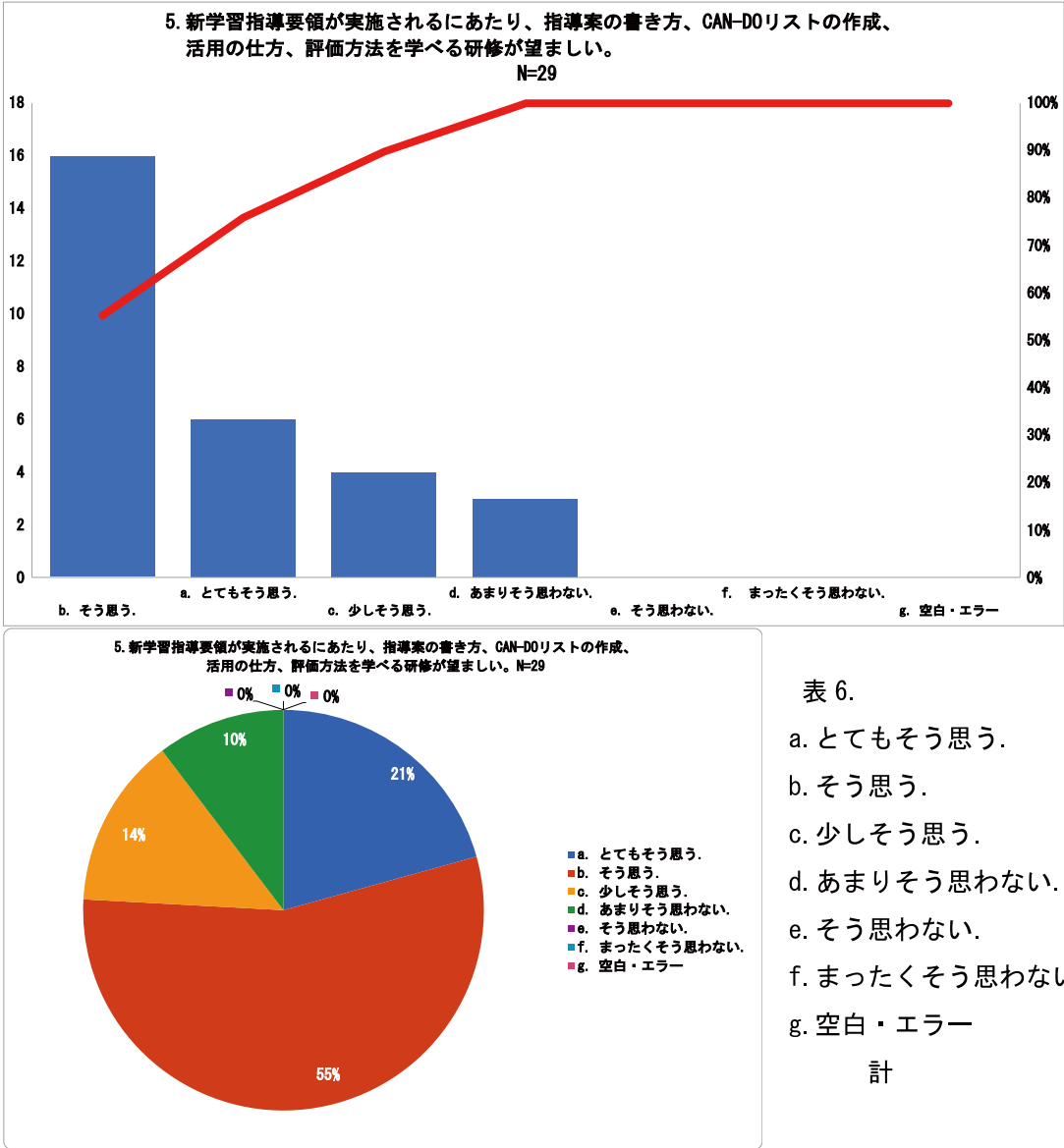


図 19.

傾向

「とてもそう思う」「そう思う」「少しそう思う」で、9 割を占めている。

分析

指導案の書き方に加え、新しい英語教育の方法、流れである、CAN-DO リストの作成、活用の仕方、評価方法について学びたいという教員が圧倒的に多いことがわかる。小学校における英語の教科化に向けて不安感を感じている小学校教員が多いのと同時に、前向きに学ぶことを求めている教員の姿が見受けられる。一方で「あまりそう思わない」と考えている教員が 10%いる。もしかしたら、CAN-DO リストの意味や、活用すること、それを用いた評価方法がどのような意味を持つのか、理解できていないゆえかもしれないように思われる。

6. 実践も大事であるが、きちんとした学問的理論も学びたいと思う。 図 20.

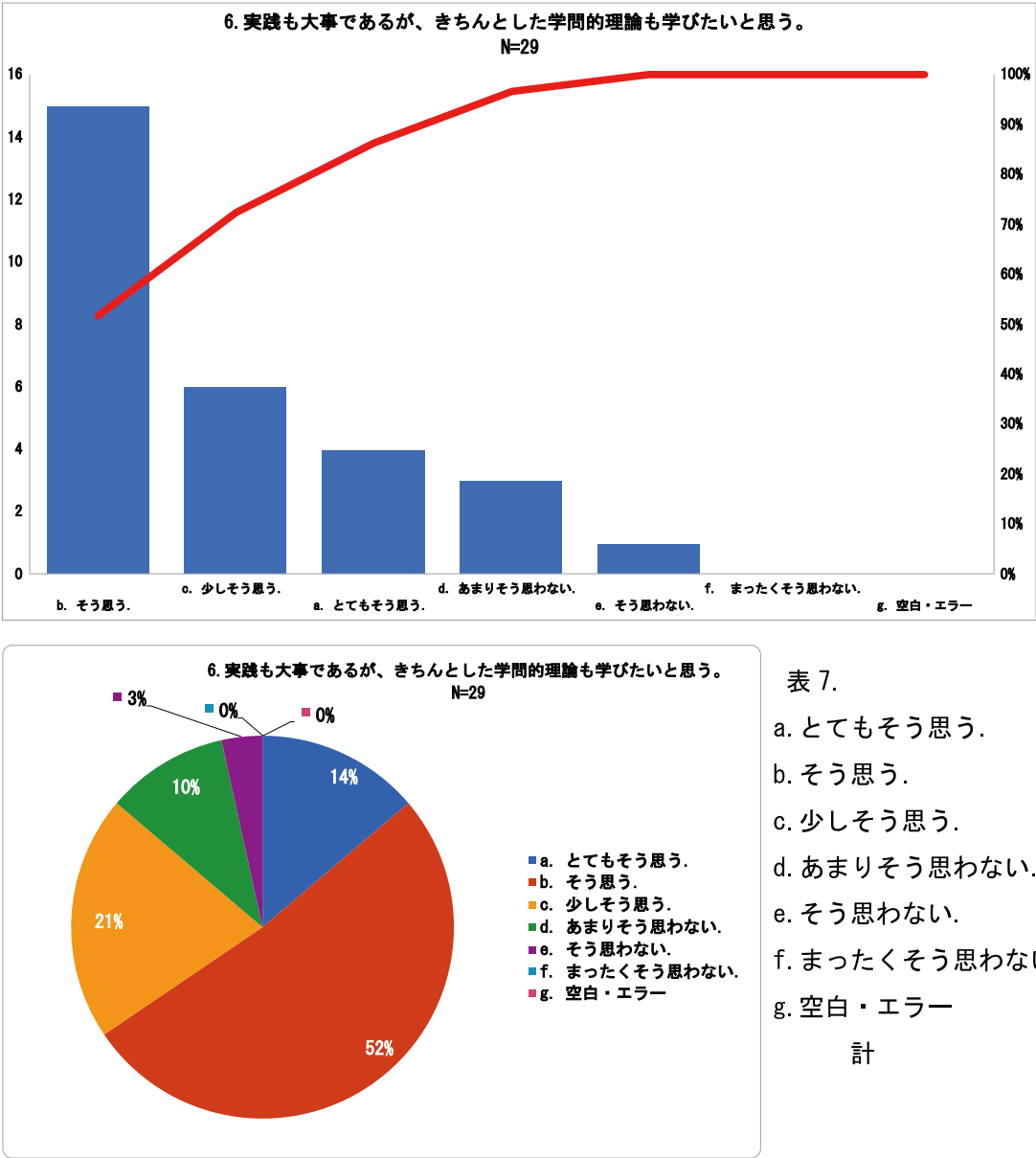


図 21.

傾向

学問的理論を学びたいと思っている教員が、全体の 87%を占めていることがわかる。一方で「あまりそう思わない」「そう思わない」という教員が 13%存在している。

分析

授業を実践するためのアイディアのベースとなる理論について学びたいと考えている教員が多いことがわかる。専門的な英語の知識を学んでこなかった小学校教員には負担が大きく、間違っことを教えられないという不安な気持ちの裏返しを読み取ることができる。

7. 研修の必要性を感じているものの、校務多忙で受けられない。 図 22.

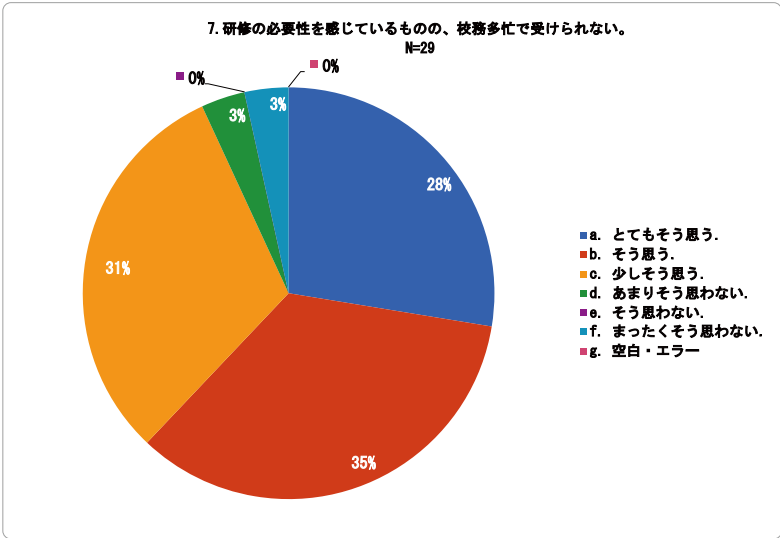
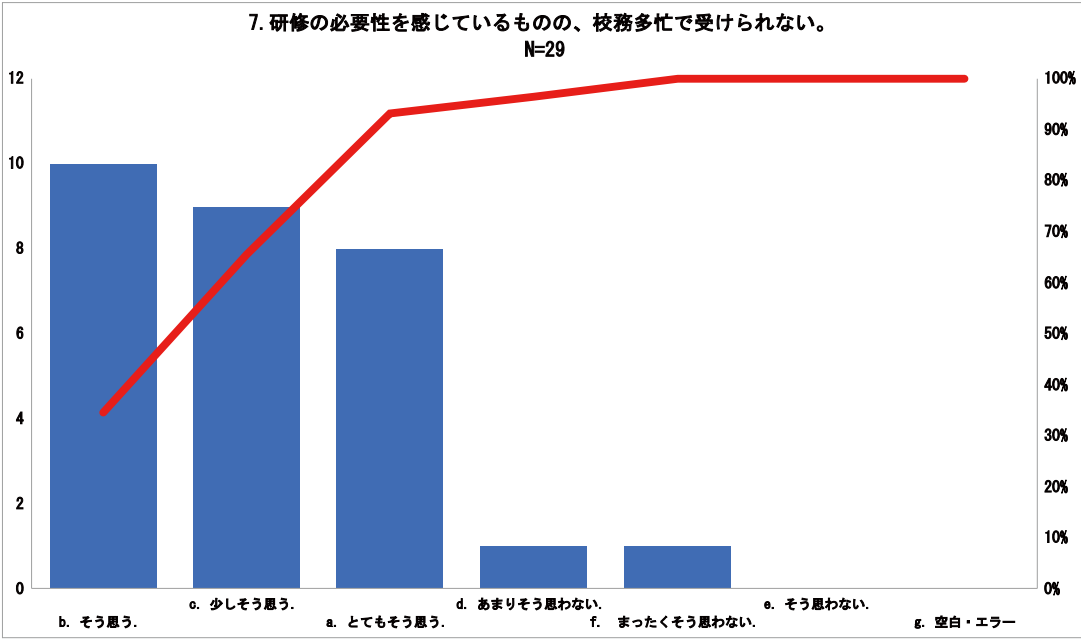


表 8.

a. とてもそう思う.	8	28%
b. そう思う.	10	35%
c. 少しそう思う.	9	31%
d. あまりそう思わない.	1	3%
e. そう思わない.	0	0%
f. まったくそう思わない.	1	3%
g. 空白・エラー	0	0%
計	29	100%

図 23.

傾向

全体の 94%の教員が校務の多忙感により、研修の必要性を感じながら、研修を受けることができていないと感じている。一方で、「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」という教員も 6%存在する。

分析

多忙化している普段の学校業務が背景にあるように思われる。研修を受ける価値を感じながら、多忙感を強く感じている実態があると考えられる。設問 2 の結果から、ベテランの教員が多いゆえ、校内でも責任ある立場の教員が多いことが予想され、研修に参加することが難しい、と回答していることが考えられる。

8. 研修の必要性を感じているものの、受ける気持ちが起こらない。 図 24.

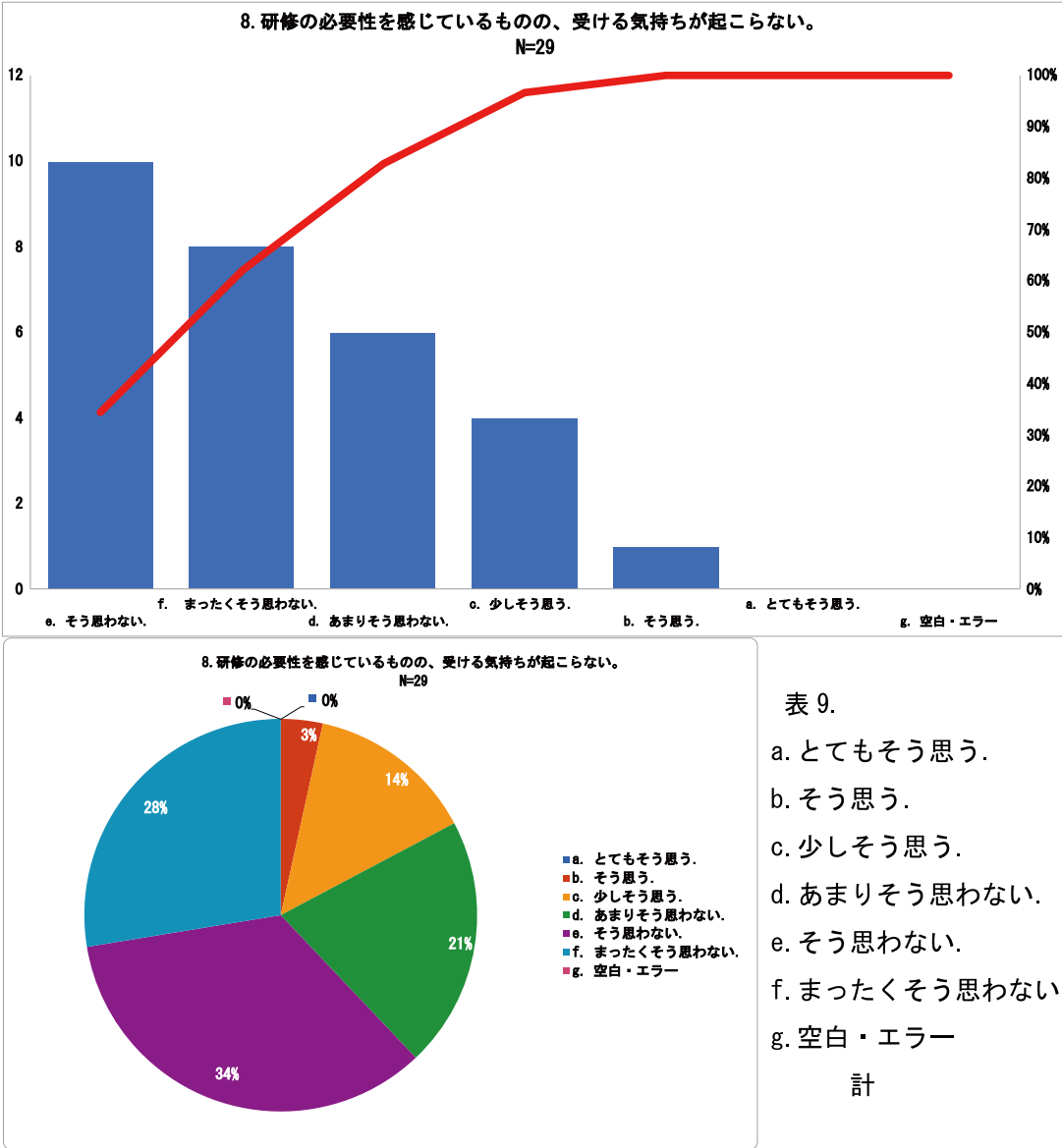


図 25.

傾向

「あまりそう思わない」「そう思わない」「全くそう思わない」という教員が全体の 83%を占めており、教員の多くが研修の必要性を感じていることがわかる。一方で、研修を受ける気持ちが起こらないという教員も 17%存在する。

分析

多忙感を感じているが、研修の必要性を感じている教員が多いことがわかる。研修を受ける気持ちが起こらないということは、単純に消極的であるということではなく、質問項目 2 などからも分かるように、参加者の年齢構成から、他にもしなければならぬことが多いということが背景にあるように思われる。

9. これまで、一年に平均何回くらい研修を受けてきましたか。 図 26.

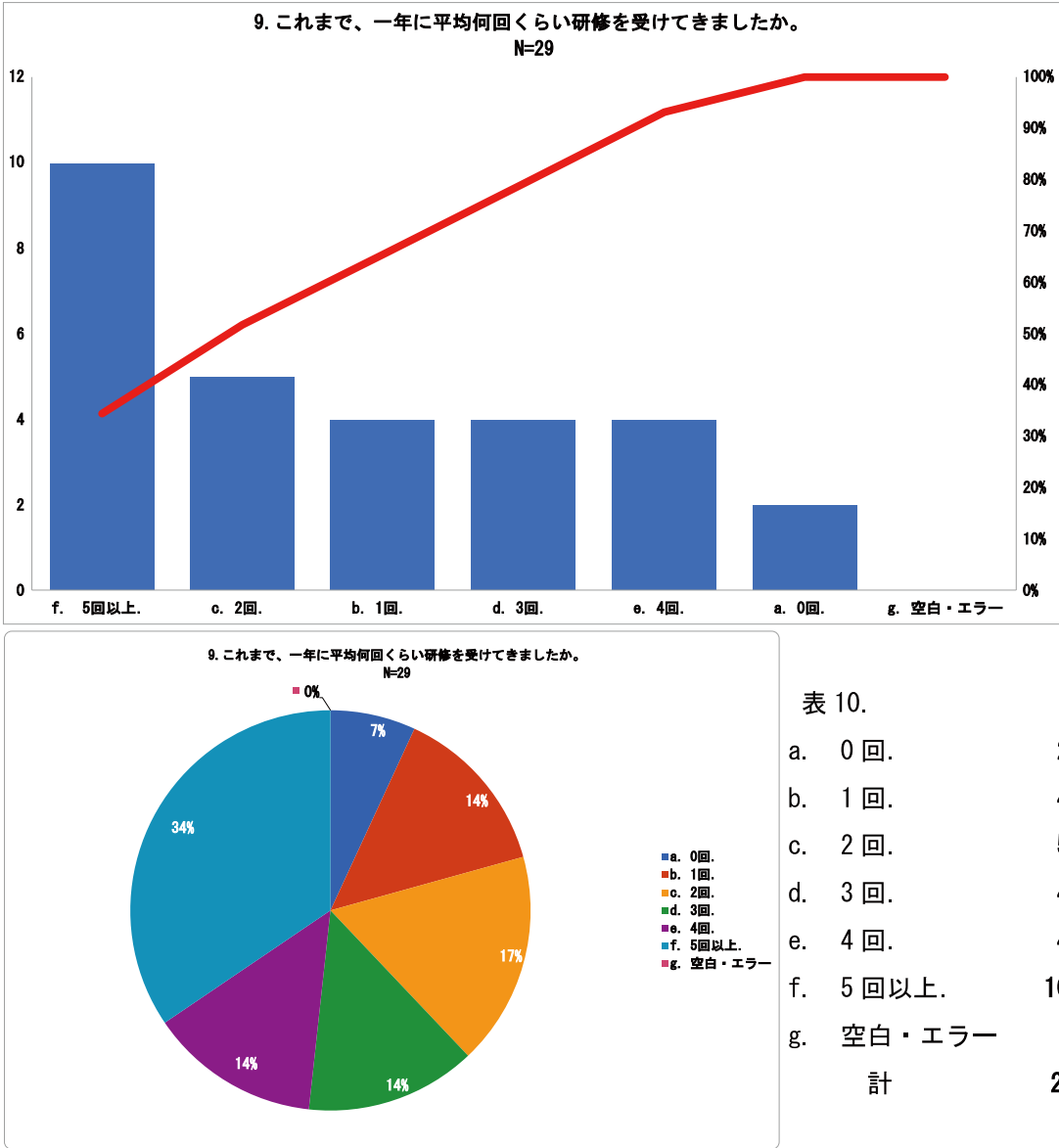


図 27.

傾向

研修を受けた回数自体を問わなければ、研修を受けた事がある教員が全体の 9 割を超えていることがわかる。特に、5 回以上と答えた回答者が 34%もいることがわかる。

分析

全体的に研修を受けることに熱心な傾向を見てとることができる。中でも、特に、5 回以上と答えた回答者が 34%もいることは驚きであると同時に喜ばしいことである。新しいことを学びたいと考えている積極的な教員が多いことがわかり、英語教育改革の今後の進展に大いに期待が持てる結果であると言える。ただし、回答者の多くは、そもそも研修の参加者であり、研修に参加していない、全体の教員も踏まえて考えると、実態は少し違う状況である可能性もありうると考えられる。

10. 今回の研修・講習を受けて、得られるものがあった。図 28.

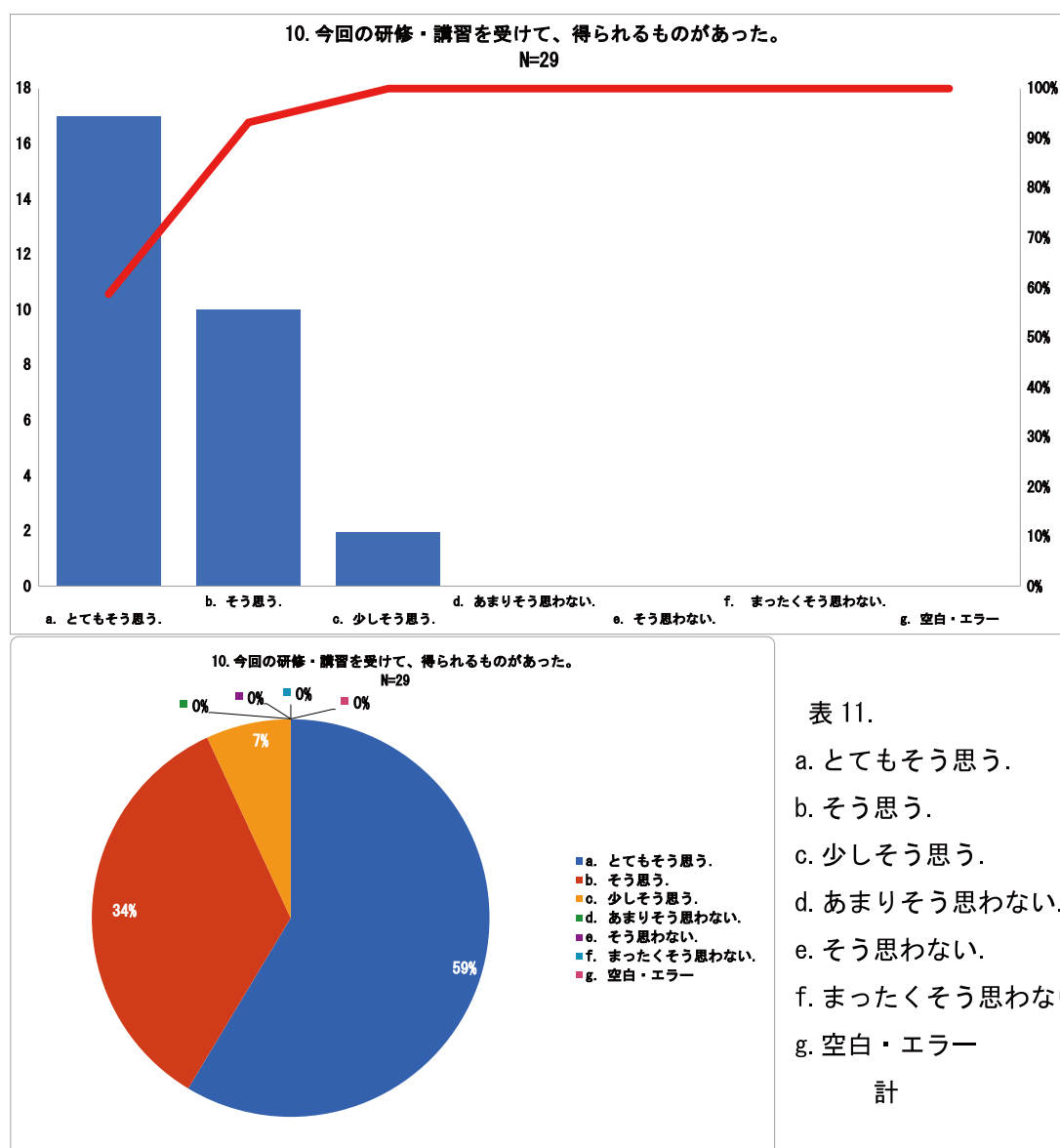


図 29.

傾向

今回の研修を終えて得るものがあったと考えている教員が、全体の 100%を占めている。特に「とても思う」が約 6 割、過半数を占めているのが特徴的である。

分析

得られるものがあった、ということにつき、「とても思う」が過半数を占めたことは、参加者が積極的に研修に参加したことを示していると同時に、今回の事業の研修プログラムが非常に適切であったことを示していると考えられる。昨今の文部科学省が進める英語教育改革の動向を踏まえた内容であり、参加者がまさに学びたかった内容であったと考えられる。

11. ウェブクラスでのeポートフォリオは、有用だと思った。 図 30.

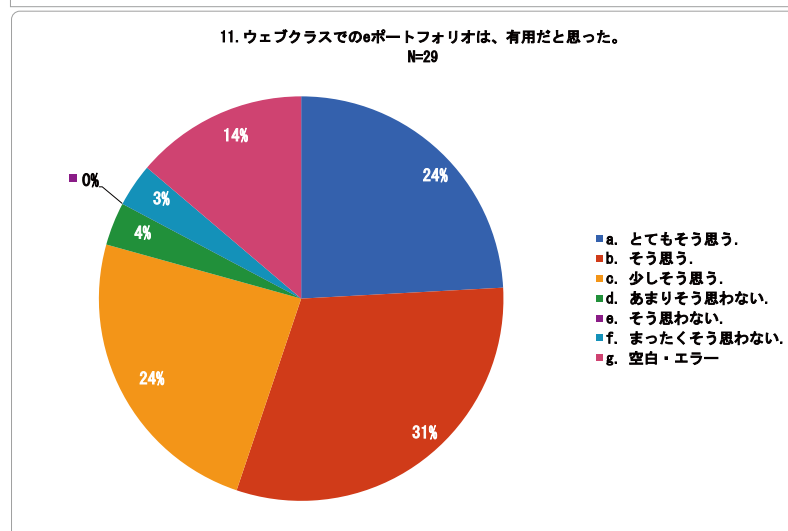
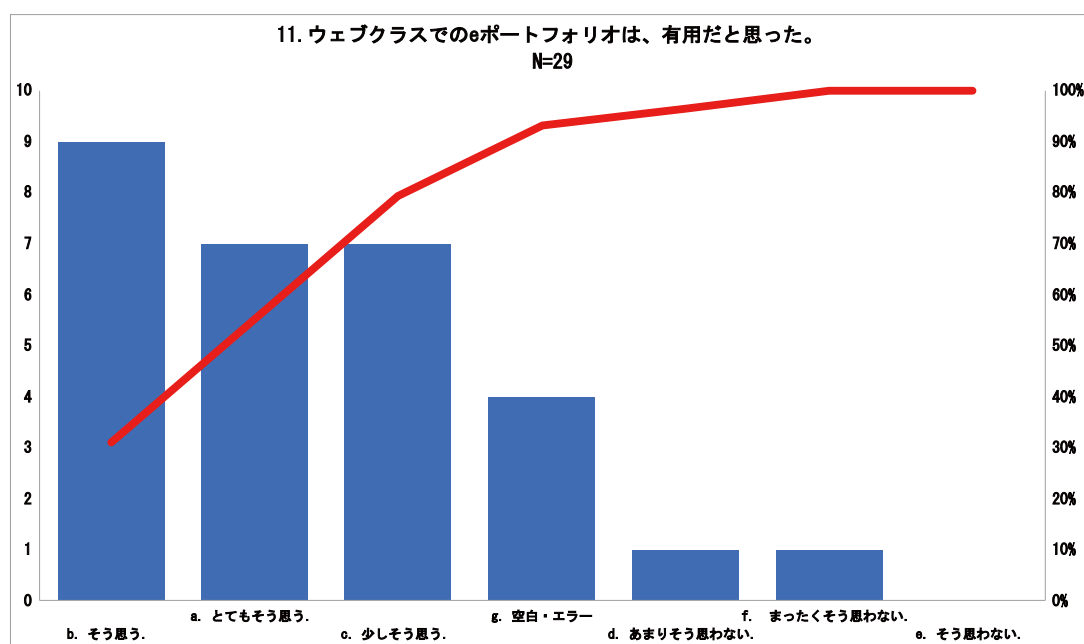


図 31.

表 12.

a. とてもそう思う.	7	24%
b. そう思う.	9	31%
c. 少しそう思う.	7	24%
d. あまりそう思わない.	1	4%
e. そう思わない.	0	0%
f. まったくそう思わない.	1	3(4)%
g. 空白・エラー	4	14%
計	29	100%

なお、割合は四捨五入を行っているため、質問項目によっては、各項目の割合の合計が、見かけ上 99%や 101%等になることもありうることを、念のため、付記させていただきます。

傾向

ウェブクラスでのeポートフォリオについて有効だと考えている教員が全体の約 8 割存在するが、一方で「そう思わない」という教員が約 8%いることがわかる。

分析

ウェブ上で自己の学びの履歴を残し、随時、その学びを振り返り、メンターや他の参加者と考えを共有するような学び方に価値を見い出している教員が多く存在していることがわかる。その反面、「そう思わない」という教員が約 8%いることに加え、「空白・エラー」の教員もいる。その原因については、この後のクロス集計や自由記述で探っていくこととする。

12. ウェブクラスでのeポートフォリオを活用した研修・講習は、
今後も、受講してみたいと思う。図 32.

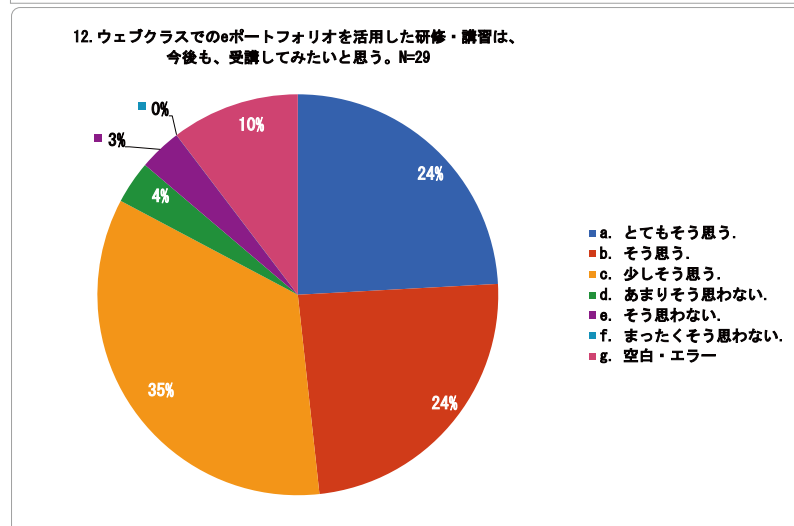
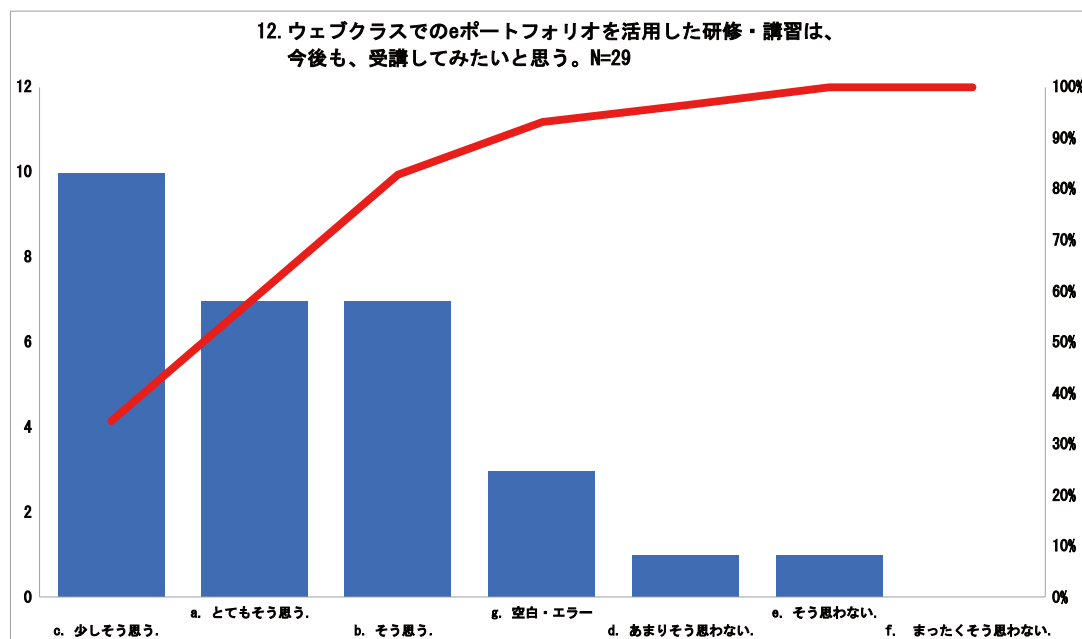


図 33.

表 13.

a. とてもそう思う.	7	24%
b. そう思う.	7	24%
c. 少しでも思う.	10	35%
d. あまりそう思わない.	1	4%
e. そう思わない.	1	3(4) %
f. まったくそう思わない.	0	0%
g. 空白・エラー	3	10%
計	29	100(1) %

なお、割合は四捨五入を行っているため、質問項目によっては、各項目の割合の合計が、見かけ上 99%や 101%等になることもありうることを、念のため、付記させていただきます。

傾向

e ポートフォリオを活用した研修・講習を今後も受講したいという教員が約 8 割存在している。一方で「そう思わない」教員も約 1 割存在する。

分析

研修の内容に意味を見出し、前向きな態度で捉えている教員の姿が伺える。これは、参加者が e ポートフォリオを活用した研修・講習の効果と、その意義を正しく理解したと同時に、その有用性に気づいたことを示していると思われる。手軽に研修内容を振り返ることができることや、フィードバックを得られることに、有効性を感じている教員が多かったことを裏づけていると思われる。

クロス集計

ここでは、質問項目の間でどのような関係があるかを探る。このアンケート調査で、もっとも核となる質問は以下の2点である。

11. ウェブクラスでのeポートフォリオは、有用だと思った。

12. ウェブクラスでのeポートフォリオを活用した研修・講習は、今後も、受講してみたいと思う。

ゆえに、まず、この2つについて、クロス表を作成し、相互に関連があるか、探ることとした。すなわち、ウェブクラスでのeポートフォリオを有用と思うかどうかで、eポートフォリオを活用した研修・講習を、今後も受講してみたいと思うかどうかの違いを見る、こととする。

表 14.

	11. ウェブクラスでのeポートフォリオは、有用だと思った。						
12. ウェブクラスでのeポートフォリオを活用した研修・講習は、今後も、受講してみたいと思う。	a. とても そう思う。	b. そう思う。	c. 少し そう思う。	d. あまりそう 思わない。	f. まったく そう思わない。	NA	総計
a. とてもそう思う。	6	1	0	0	0	0	7
b. そう思う。	1	5	1	0	0	0	7
c. 少しそう思う。	0	3	5	1	0	1	10
d. あまりそう思わない。	0	0	1	0	0	0	1
e. そう思わない。	0	0	0	0	0	1	1
NA	0	0	0	0	0	0	3
総計	7	9	7	1	1	1	29

傾向と分析
表 14 に関し
て、フィッ
シャーの正
確確率検定
を行ったと
ころ、p 値
は 7.753e-

06 となり、有意差 ($p < 0.05$)
が認められた。よって、「11.
ウェブクラスでの e ポートフ
ォリオは、有用だと思った」
と「12. ウェブクラスでの e ポ
ートフォリオを活用した研修
・講習は、今後も、受講して
みたいと思う」に関連がある

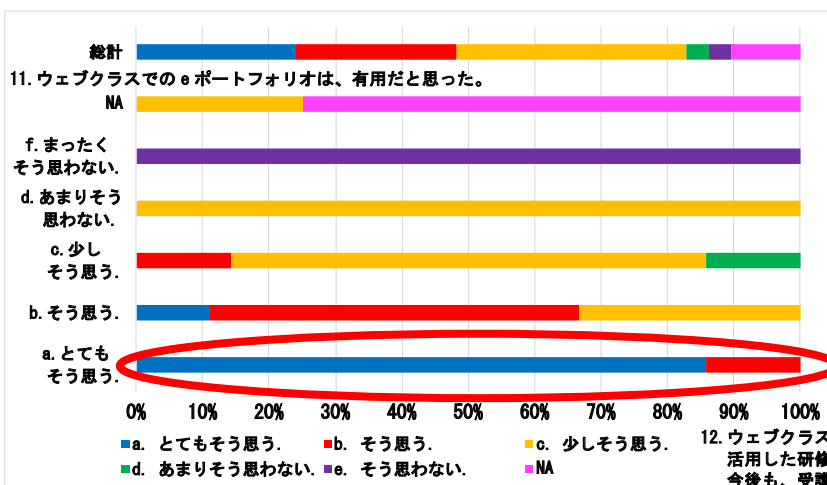


図 34. 有用と思うかどうかで、e ポートフォリオを活用した研修・講習を、今後も受講してみたいと思うかどうか。

といえる。特に、ウェブク
ラスでの e ポートフォリオは
とても有用だと思ふし、e ポ
ートフォリオを活用した研
修・講習は、今後も、受講
してみたいと思う、という
回答がもっとも多かった。

ただ、ここで、一つ、気
になった点がある。それ
は、質問項目 11「ウェブク

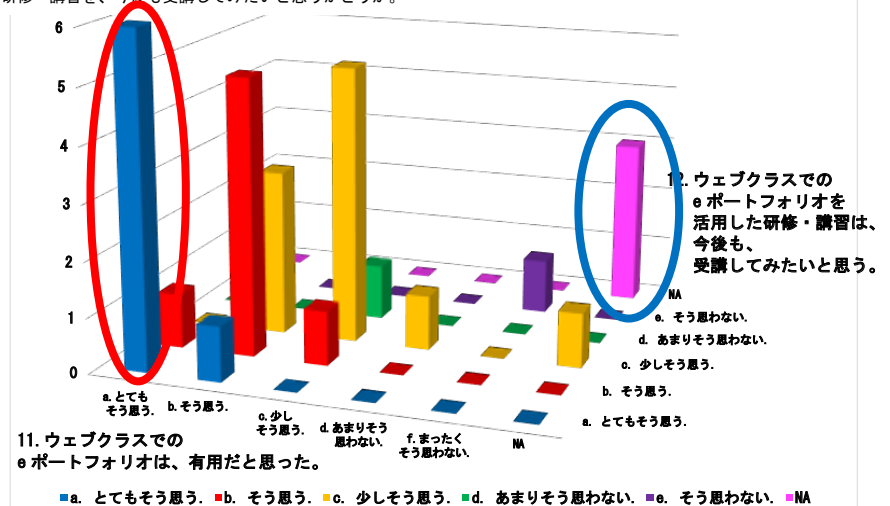


図 35. 有用と思うかどうかで、e ポートフォリオを活用した研修・講習を、今後も受講してみたいと思うかどうか。

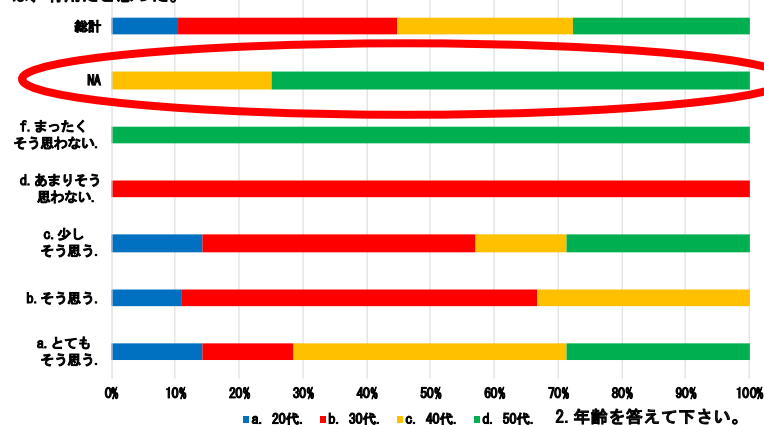
ラスでの e ポートフォリオは、有用だと思った」と、質問項目 12「ウェブクラスでの e ポートフォリオを活用した研修・講習は、今後も、受講してみたいと思う」において、**無回答者が一定数、存在した**ことである。他の質問項目に比べ、突出して多い。それゆえ、その理由を探ることとする。今回の取り組みは、e ポートフォリオという ICT を活用した取り組みであるが、一般論として、ICT の活用は年齢差により、得手不得手が生じる傾向がある。それゆえ、質問項目 2「年齢を答えて下さい」と質問項目 11「ウェブクラスでの e ポートフォリオは、有用だと思った」、質問項目 2「年齢を答えて下さい」と「12. ウェブクラスでの e ポートフォリオを活用した研修・講習は、今後も、受講してみたいと思う」で、それぞれクロス表を作成した。

年齢によって、ウェブクラスでの e ポートフォリオを有用と思うかどうか。

表 15. 年齢によって、ウェブクラスでの e ポートフォリオを有用と思うかどうか。

11. ウェブクラスでのeポートフォリオは、有用だと思った。							
2. 年齢を 答えて下さい	a. とても そう思う.	b. そう思う.	c. 少し そう思う.	d. あまりそう 思わない.	f. まったく そう思わない.	NA	総計
a. 20代.	1	1	1	0	0	0	3
b. 30代.	1	5	3	1	0	0	10
c. 40代.	3	3	1	0	0	1	8
d. 50代.	2	0	2	0	1	3	8
総計	7	9	7	1	1	4	29

11. ウェブクラスでの e ポートフォリオ
は、有用だと思った。



傾向

「とてもそう思う」と答えた回答者はどの年代にも存在し、特に 40 代が一番多い。50 代も比較的多いと言える。「そう思う」と回答した教員は 20 代から 40 代であり、特に 30 代にもっとも多い。しかし、ここで注目すべきは、50 代である。「とてもそ

図 36. 年齢によって、ウェブクラスでの e ポートフォリオを有用と思うかどうか。

う思う」と回答した教員が一定数いるものの、「そう思う」はゼロ、「少しそう思う」が若干いる程度である。逆に、「まったくそう思わない」という否定的な回答者もいた。しかし、特に際立つのは、「無回答」者の多さである。40 代にも無回答者はいるが、50 代がもっとも多い。ただし、表 15 に関して、フィッシャーの正確確率検定を行ったところ、p 値は 0.2591 となり、このクロス表自体には、有意差 ($p < 0.05$) は認められなかった。

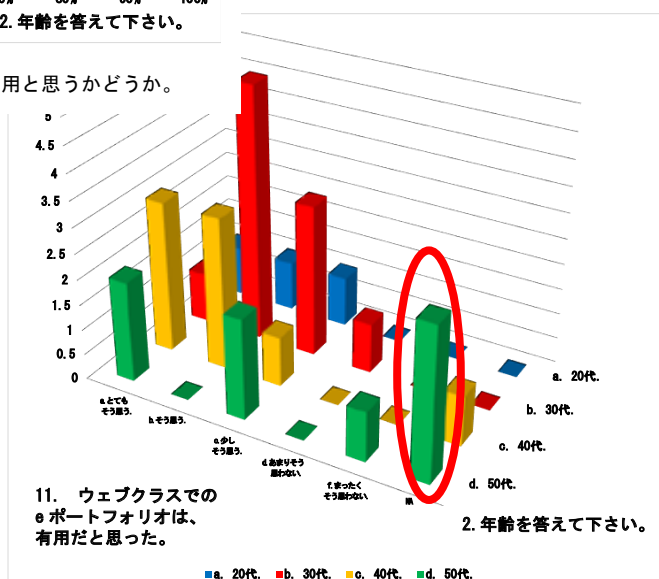


図 37. 年齢によって、ウェブクラスでの e ポートフォリオを有用と思うかどうか。

年齢によって、ウェブクラスでの e ポートフォリオを活用した研修・講習を、今後も、受講してみたいと思うかどうか。

表 16.

12. ウェブクラスでのeポートフォリオを活用した研修・講習は、今後も、受講してみたいと思う。							
2. 年齢を 答えて下さい	a. とても そう思う。	b. そう思う。	c. 少し そう思う。	d. あまりそう 思わない。	e. そう 思わない。	NA	総計
a. 20代.	0	2	1	0	0	0	3
b. 30代.	2	2	5	1	0	0	10
c. 40代.	3	2	2	0	0	1	8
d. 50代.	2	1	2	0	1	2	8
総計	7	7	10	1	1	3	29

傾向
「とても
そう
思う」
と答え
た回答
者は 30
代、40
代、50
代に見

12. ウェブクラスでの e ポートフォリオを活用した研修・講習は、今後も、受講してみたいと思う。

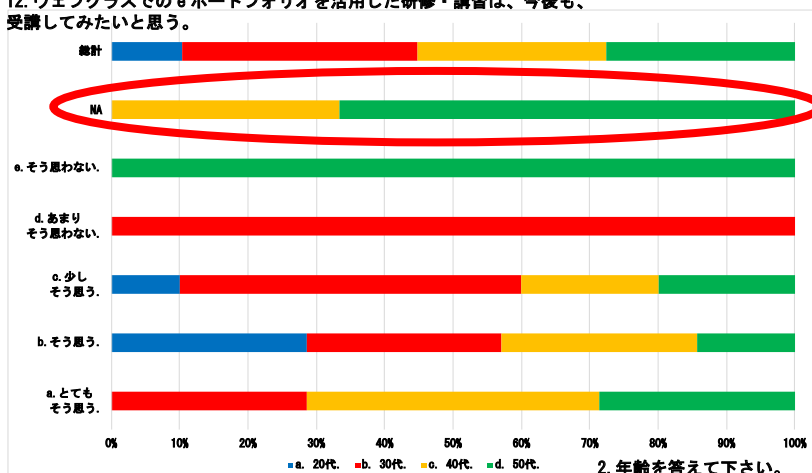


図 38. 年齢によって、ウェブクラスでの e ポートフォリオを活用した研修・講習を、今後も、受講してみたいと思うかどうか。

ることができる。特に 40 代に一番多い。「そう思う」と回答した教員はどの年代にもまんべんなく存在する。しかし、ここで注目すべきは、30 代である。基本的に肯定的な傾向があるものの、「少しそう思う」がもっとも多い。逆に、「あまりそう思わない」という否定的な回答者もいた。次に注目すべきは、50 代である。「とてもそう思う」「そう思う」と好意的な回答を寄せた者がいる一方、「そう思わない」と否定的な回答をした教員もいた。しかし、特に際立

つのは、年代が上の回答者に、「無回答」が多いことである。40 代にも無回答者はいるが、50 代がもっとも多い。ただし、表 16 に関し、フィッシャーの正確確率検定を行ったところ、p 値は 0.7134 となり、このクロス表自体には、有意差 ($p < 0.05$) は見られなかった。

分析 クロス表の結果から、年齢による質問項目 11「ウェブクラスでの e ポートフォリオは、有用だと思った」の回答の違いと、年齢による質問項目 12「ウェブクラスでの e ポートフォリオを活用した研修・講習は、今後も、受講してみたいと思う」の回答の違いには、共に有意差は認められず、関連はなかった。ただし、回答の傾向として、一部に、ほぼ同じ傾向を確認することができた。それは、**年齢が上の世代に、消極的な回答が存在することと、無回答者が集中していたこと**である。無回答はあくまで無回答であるが、他の質問項目で適切な回答をしてきていることを考慮すれば、ここでの無回答には、何らかのメッセージ性があるように思われる。言い換えれば、ベテランの教員の一部は、何らかのネガティブな考えを持っているのではないか、ということである。

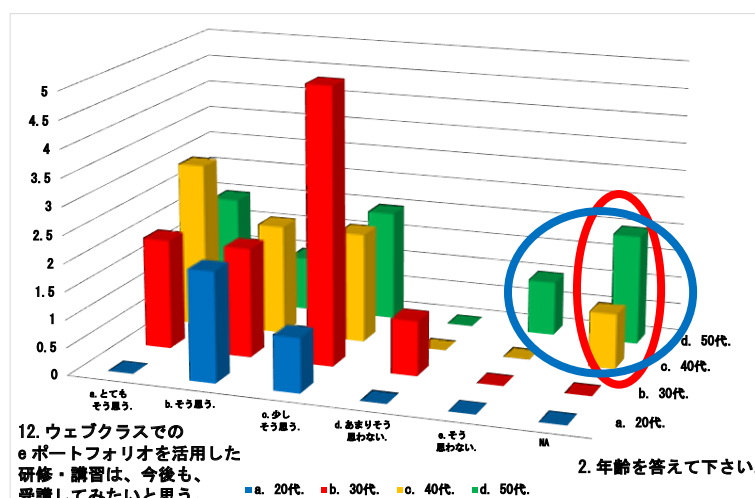


図 39. 年齢によって、ウェブクラスでの e ポートフォリオを活用した研修・講習を、今後も、受講してみたいと思うかどうか。

13. 英語のウェブクラスでのeポートフォリオを活用した教員研修について、
よかった点、悪かった点も含めて、お考えをお聞かせ下さい（自由記述）

Database Stats		
総抽出語数（使用）：	672 (283)	
異なり語数（使用）：	231 (171)	
文書の単純集計：	集計単位	ケース数
	文	46
	段落	13
	H5	29

基本データ 図 40.

表 17. 出現頻度数

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
1 場	5	21 共有	2
2 理解	5	22 結果	2
3 人	4	23 個人	2
4 分かる	4	24 使う	2
5 Wi-Fi	3	25 使用	2
6 スマホ	3	26 若い	2
7 フィードバック	3	27 集計	2
8 時間	3	28 小さい	2
9 授業	3	29 説明	2
10 先生	3	30 打ち込む	2
11 問題	3	31 提出	2
12 PC	2	32 良い	2
13 1つ	2	33 eポートフォリオ	1
14 タブレット	2	34 あいまい	1
15 ネット	2	35 お互い	1
16 悪い	2	36 しかた	1
17 画面	2	37 はじめ	1
18 解説	2	38 アクセス	1
19 解答	2	39 アンケート	1
20 環境	2	40 ウェブクラス	1

1	場	名詞C	5
2	理解	サ変名詞	5
3	人	名詞C	4
4	分かる	動詞	4
5	Wi-Fi	タグ	3
6	スマホ	タグ	3
7	フィードバック	サ変名詞	3
8	時間	副詞可能	3
9	授業	サ変名詞	3
10	先生	名詞	3
11	問題	ナイ形容	3
12	PC	未知語	2
13	1つ	名詞	2
14	タブレット	名詞	2
15	ネット	名詞	2
16	悪い	形容詞	2
17	画面	名詞	2
18	解説	サ変名詞	2
19	解答	サ変名詞	2
20	環境	名詞	2

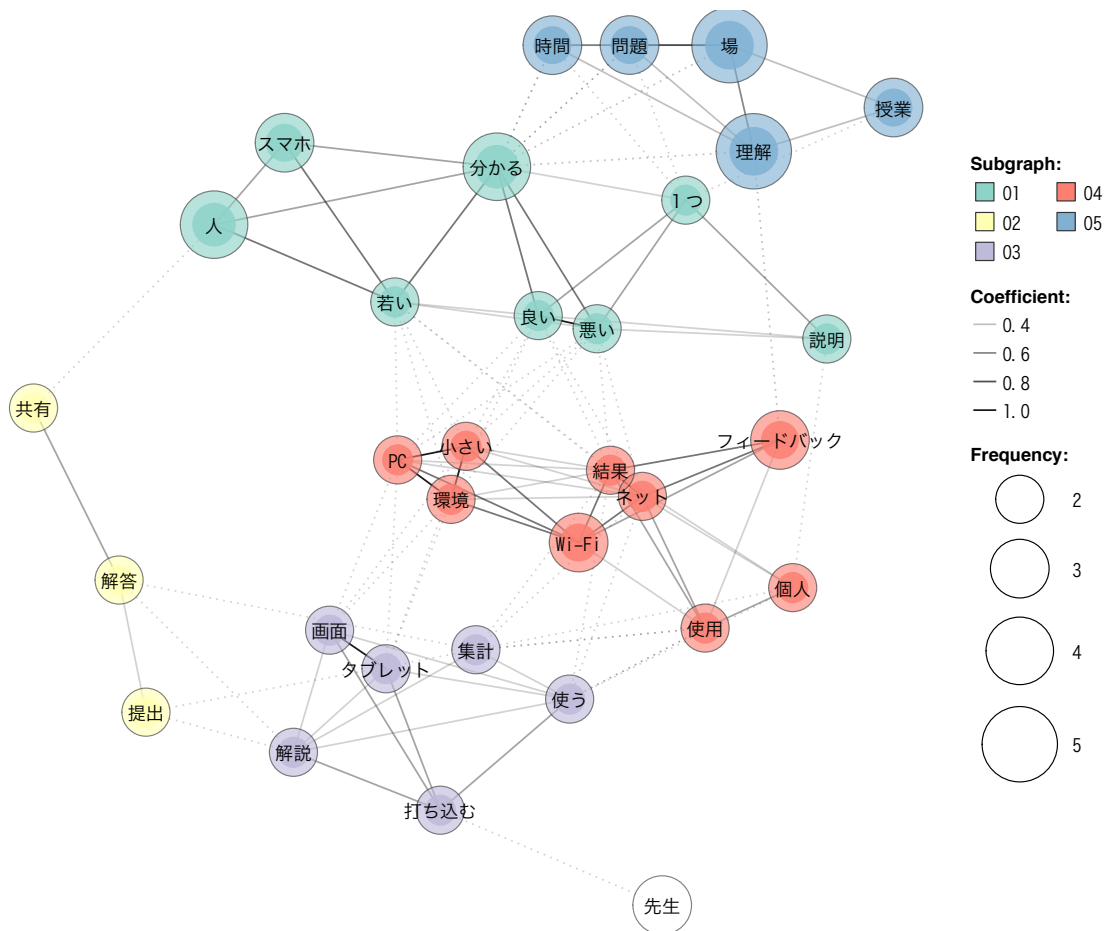
図 41. 出現頻度数

傾向

出現頻度数が多い順に見ていくと、大まかに捉えるなら、「場」「理解」「人」「分かる」となっている。

次に「Wi-Fi」「スマホ」「フィードバック」「時間」「授業」「先生」「問題」が続いている。

共起ネットワーク 図 42.



傾向と分析

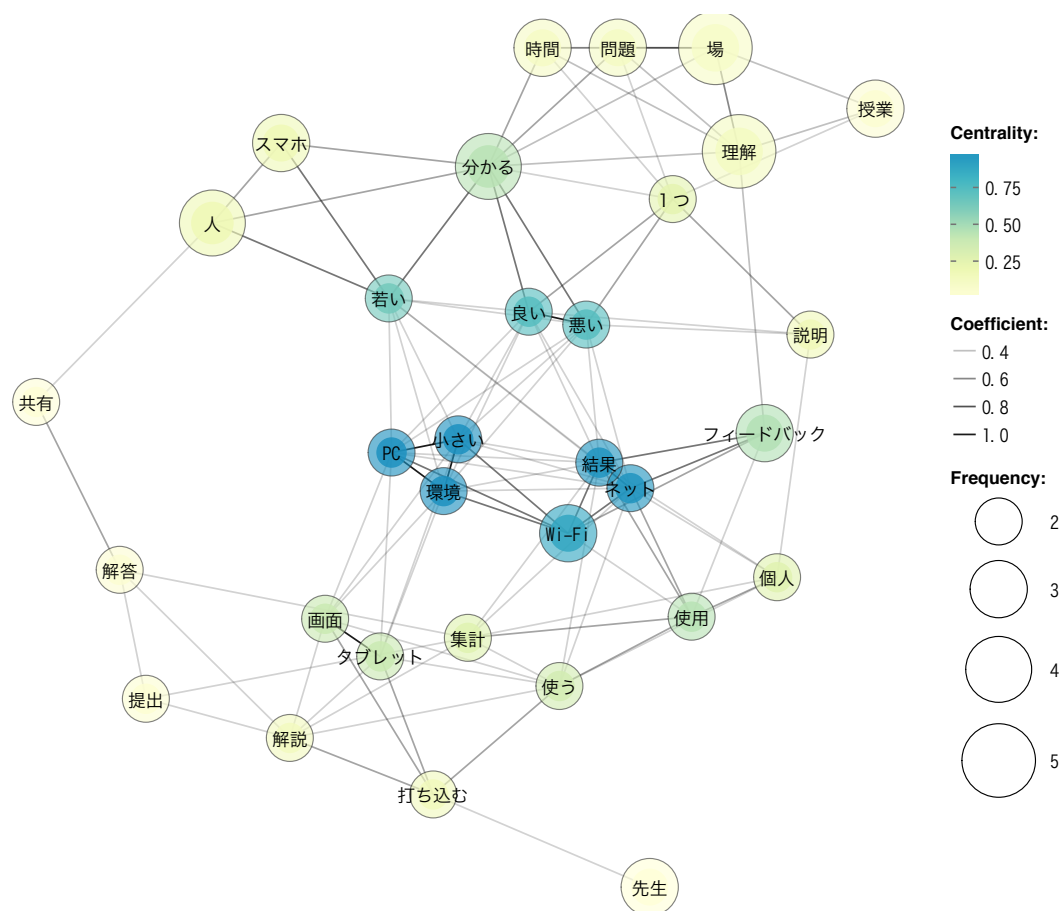
良い意味と悪い意味の2つのサブグラフにわけられるように思われる。

良い意味は、左の黄色のサブグラフであり、「解答」を「提出」して「共有」できる点が良い、という意味であると思われる。また、右上の青色のサブグラフは、「授業」の時にその「場」で「問題」を解いたりできるので、「時間」の節約になるし、「理解」も深まるという意味であると考えられる。

悪い面は、中央下の紫色のサブグラフは、「タブレット」は「画面」が小さいので、「打ち込む」のが大変であるということを示している。

また、良い面と悪い面の両方に触れているサブグラフもある。中央の赤色のサブグラフは、「WiFi」「ネット」「フィードバック」「結果」「小さい」「環境」「PC」などであり、「WiFi」「ネット」環境について、良い面はすぐ「フィードバック」をもらえて「結果」がわかるということであり、悪い面は、スマホだと画面が「小さい」ので、「PC」などの「環境」が必要であるという意味を示している。真ん中やや上の緑色のサブグラフは、「若い」「人」が「スマホ」を使う分にはいいが「良い」面と「悪い」面があると思うという意味であると考えられる。

共起ネットワーク 固有ベクトル中心性 図 43.

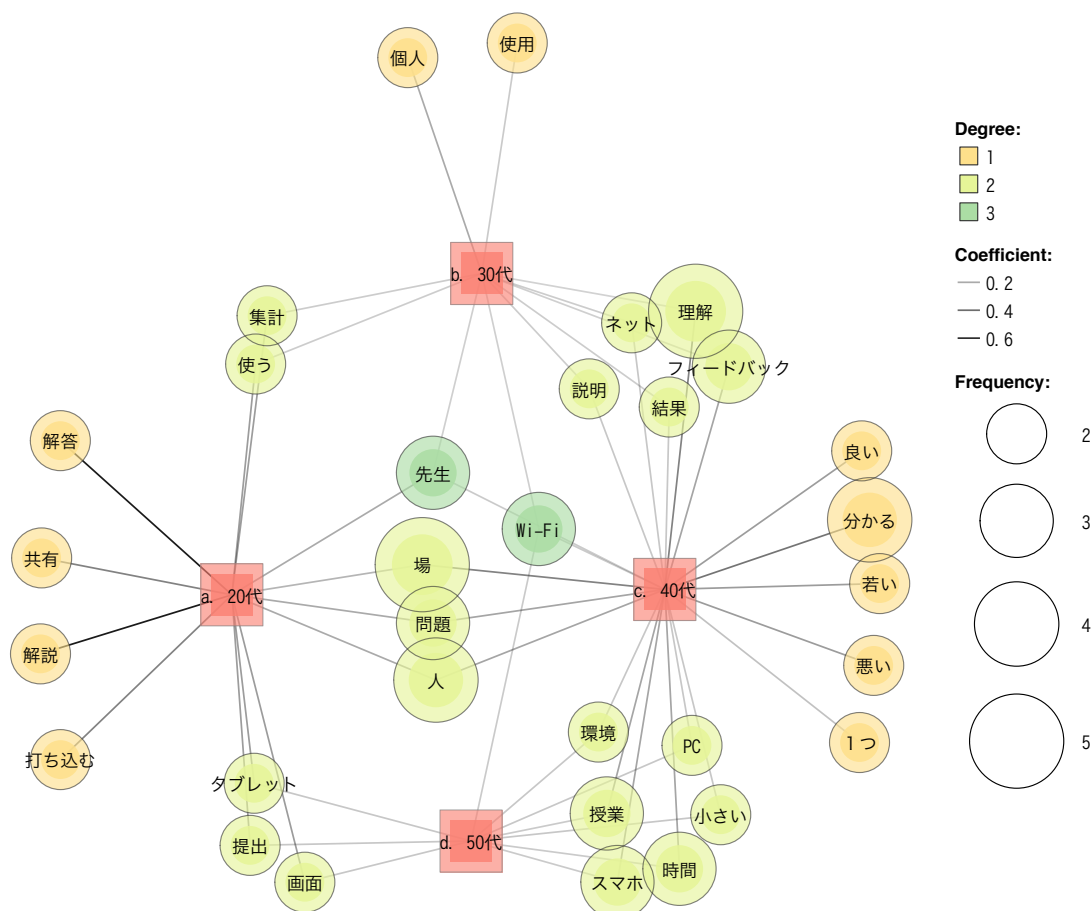


傾向と分析

色の濃い、中心性を示す言葉は、前のページの分析結果から、ポジティブとネガティブな意味の両方を示しているサブグラフであることがわかる。「WiFi」や「ネット」「環境」で使用するものなので、すぐに「フィードバック」がもらえたり、「結果」がわかることは良いことであるが、スマホなどだと画面が「小さい」ため、「PC」などでないと難しい、というネガティブな意味である。

このサブグラフが、このネットワークにおいて、中心的な役割を果たしているということは、やはり、ICT の部分に、関心が最も高かったことを示しているものと思われる。

共起ネットワーク 外部変数 年齢 図 44.



傾向と分析

外部変数に年代を用いることで、年代毎に、どのような特徴的な言葉を書いていたか、確認することができる。

「20 代」では、「解答」や「解説」をすぐにその場で見れて、「解答」を「共有」できる点が良い、と答えている。

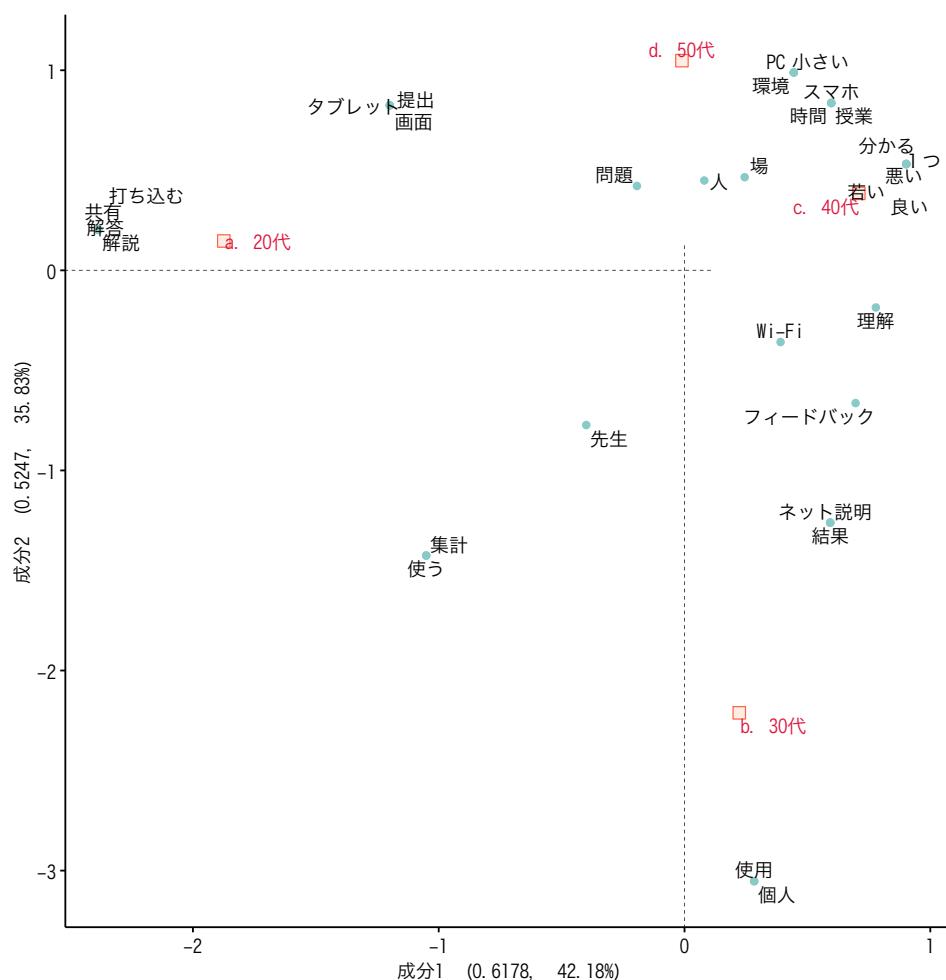
「30 代」は、ネット回線を「使用」するため、料金の問題や、「個人」情報などについて気になる、という回答であった。

「40 代」は、「良い」点は、すぐにその場で答が「分かる」ことや、「分かる」と「分か」らないことが、理解できる点が良い、という記述があった。また、「若い」人にとっては、便利かもしれないが、年配の人には難しい、ということに加え、「一つ」一つ吟味できる点が良いが、悪い点としては、ネット環境がきちんとしていない点であると述べている。

「50 代」には、特に特徴的な言葉は見られなかった。

これらから分かることは、若い教員にとっては、便利感があるが、ベテランの教員は扱いが難しいと感じていることがわかる。つまり、年代による IT リテラシーの差を示しているように思われる。

多重対応分析 年齢 図 45.



傾向と分析

多重対応分析により、外部変数ありの共起ネットワークとは、数理モデルが違うが、ここでも、年代毎に、どのような特徴的な言葉を書いていたか、確認することができる。

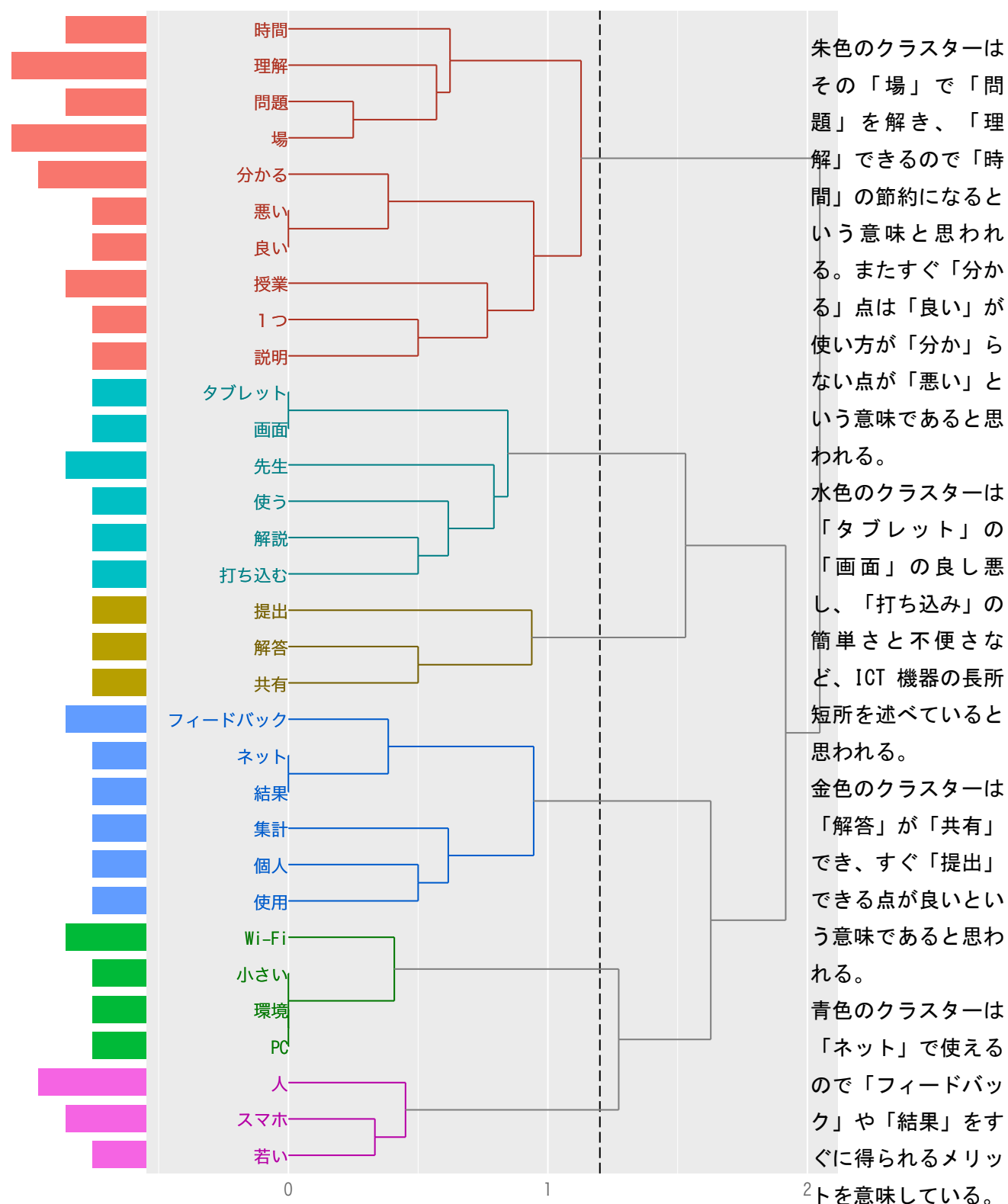
「20代」では、「解答」「解説」「共有」や近い位置に配置されている。「解答」や「解説」をすぐにその場で見れて、「解答」を「共有」できる点が良いという意味を示している。

「30代」は、近くに配置されている言葉はなかった。

「40代」は、「良い」「悪い」「若い」に近い位置にある。これは、「若い」人にとっては、便利かもしれないが、年配の人には難しい、ということに加え、「良い」面と「悪い」面の両方がある、ということを示している。

「50代」の近くにも、特に配置されている語はなかった。

これらから分かることは、若い教員は便利感を感じているが、ベテランの教員は特に強く感じている言葉はなく、むしろ、良い面と悪い面の両方を感じていることがわかる。ここでもまた、年代による IT リテラシーの差を示しているように思われる。

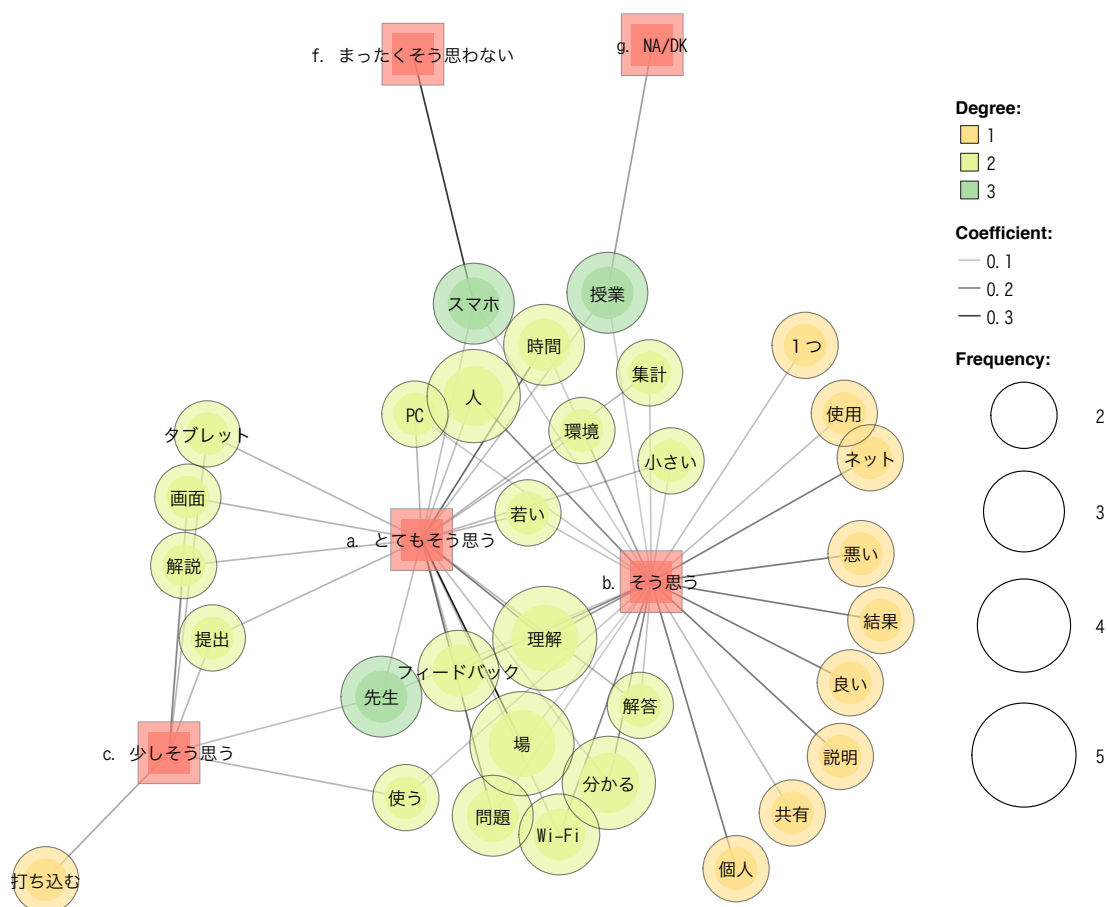


緑色のクラスターは、スマホだと画面が「小さい」し、「PC」や「WiFi」などの「環境」が必要であるという意味を示している。

ピンク色のクラスターは、「若い」「人」が「スマホ」を使うには良いかもしれないが、ベテランの先生には画面が小さ過ぎるという意味になるように思われる。

共起ネットワーク 外部変数

1 1. ウェブクラスでの e ポートフォリオは、有用だと思った。 図 47.



傾向と分析

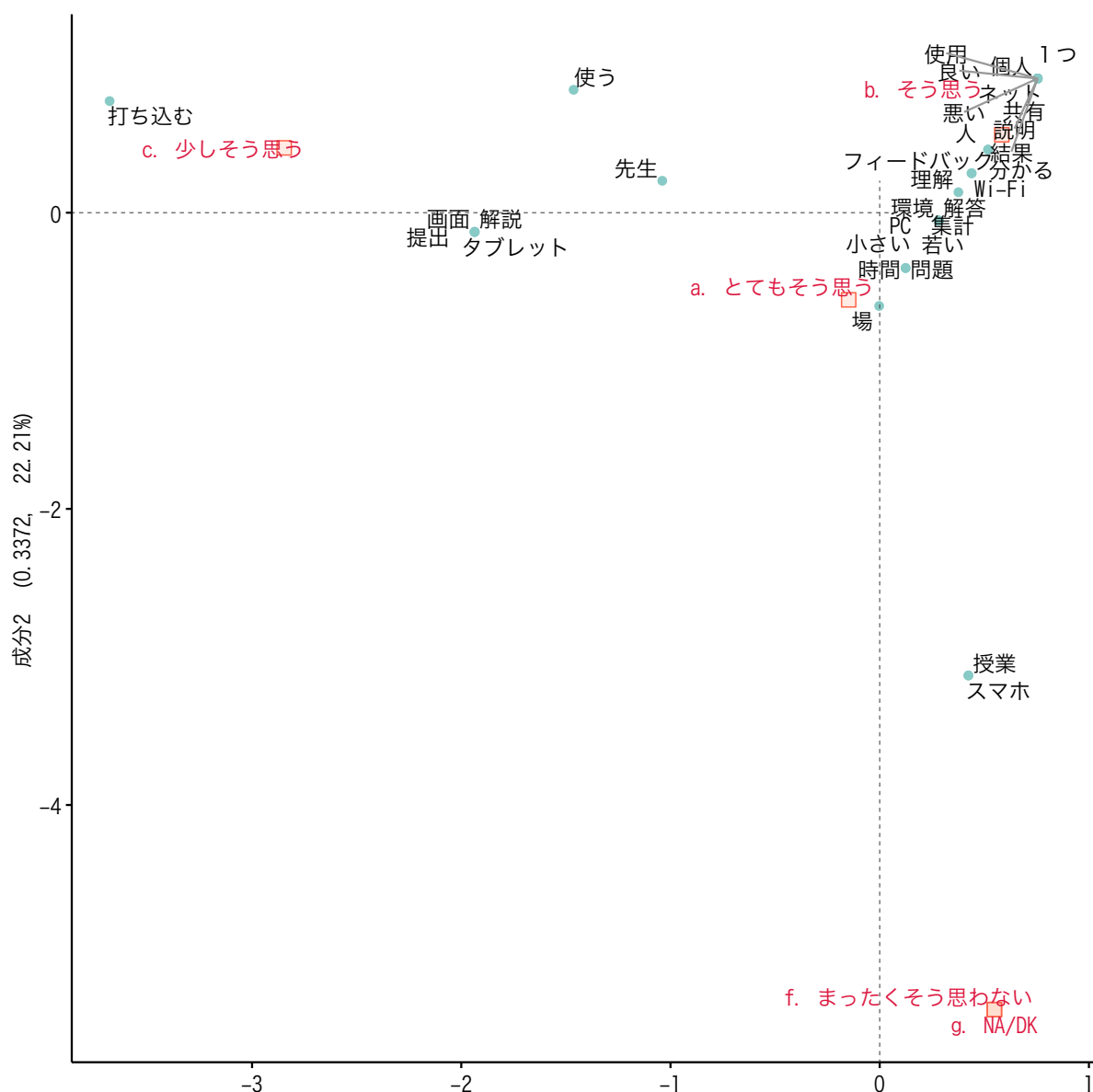
ここでは、共起ネットワーク図に、外部変数の質問項目 11「ウェブクラスでの e ポートフォリオは、有用だと思った。」を用いることで、それぞれ「a. とてもそう思う」「b. そう思う」「c. 少しそう思う」「d. あまりそう思わない」「e. そう思わない」「f. まったくそう思わない」と回答した受講者が、どのような言葉を、特に記述していたかを見ることができる。

「a. とてもそう思う」と思った受講者は、他の回答をした受講者と同じような記述をしており、特に特徴的な言葉はなかった。「b. そう思う」と答えた回答者は、もっとも数多く、特徴的な言葉を記述していた。「c. 少しそう思う」と回答した教員は、「打ち込む」という言葉だけが特徴的であった。「d. あまりそう思わない」「e. そう思わない」と答えた回答者はおらず、「f. まったくそう思わない」と答えた受講者は他の受講者も答えていたが「スマホ」とだけ、記述があった。

これらから分かることは、有効だと考えた教員ほど、積極的にその有用さを書き込むと同時に、特に「b. そう思う」と答えた回答者が、メリット・デメリットを特に記述していたことがわかる。

多重対応分析

11. ウェブクラスでのeポートフォリオは、有用だと思った。 図 48.



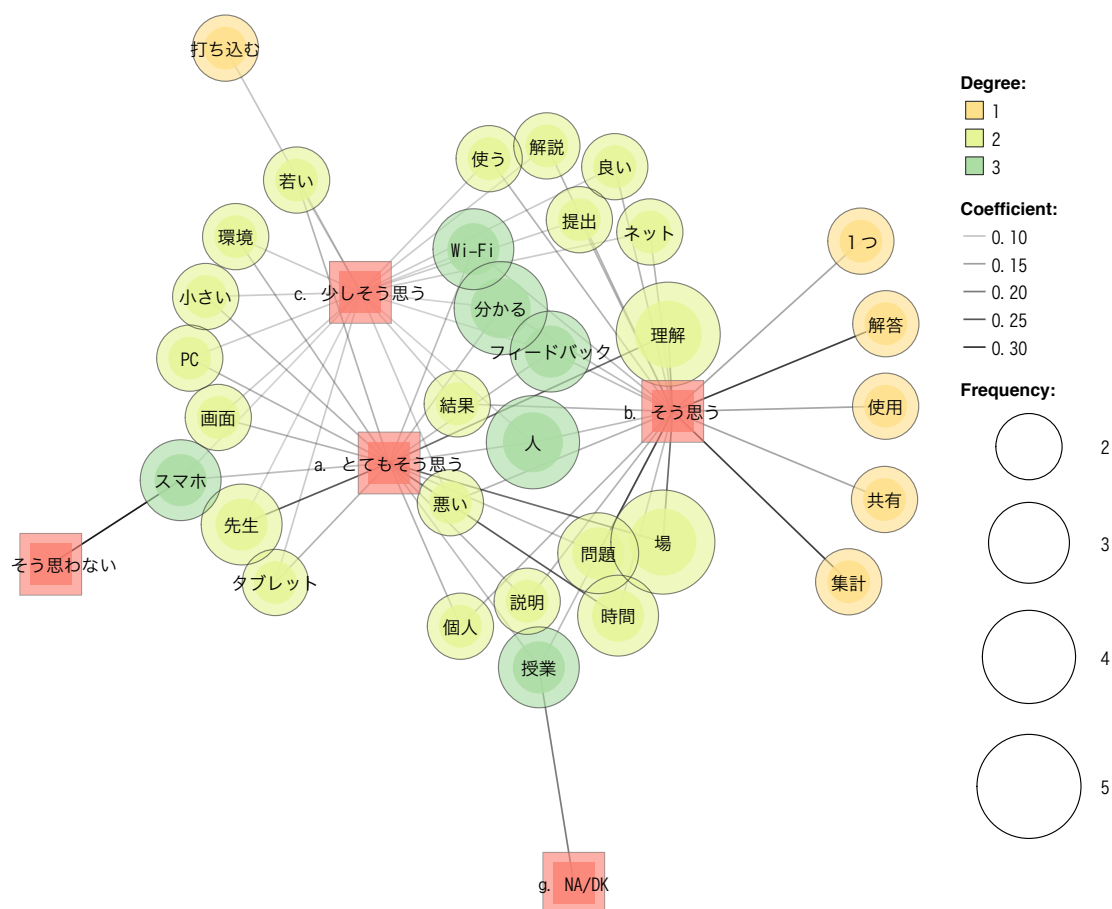
傾向と分析

多重対応分析により、外部変数ありの共起ネットワークとは、数理モデルが違いますが、ここでも、質問項目11「ウェブクラスでのeポートフォリオは、有用だと思った。」に対する回答毎に、どのような特徴的な言葉を書いていたか、確認することができる。

右上に単語が密集しているのがわかる。そこに「a. とてもそう思う」と「b. そう思う」が位置していることから、「a. とてもそう思う」「b. そう思う」と答えた回答者が、もっとも数多く、特徴的な言葉を記述していたことがわかる。「c. 少しそう思う」の近くには「打ち込む」という言葉しかない。「f. まったくそう思わない」と「エラー・空白」の近くにまったく言葉が配置されていない。また、「d. あまりそう思わない」「e. そう思わない」と答えた回答者はいないため、図上には示されていない。概ね、前頁の分析結果と同じ結果になるように思われる。

共起ネットワーク 外部変数

12. ウェブクラスでのeポートフォリオを活用した研修・講習は、今後も、受講してみたいと思う。 図 49.



傾向と分析

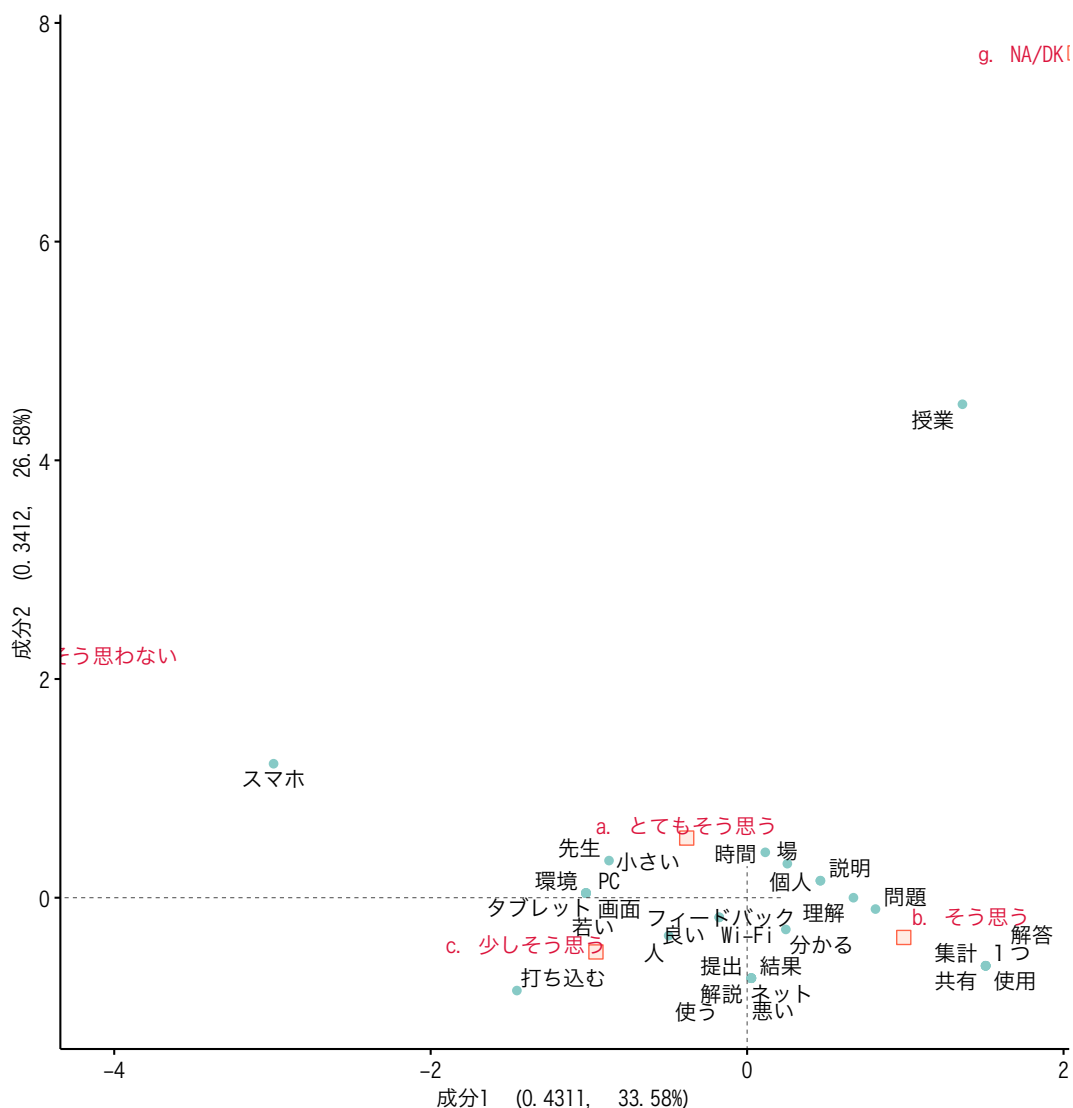
ここでは、共起ネットワーク図に、外部変数の質問項目 12「ウェブクラスでのeポートフォリオを活用した研修・講習は、今後も、受講してみたいと思う。」を用いることで、それぞれ「a. とてもそう思う」「b. そう思う」「c. 少しそう思う」「d. あまりそう思わない」「e. そう思わない」「f. まったくそう思わない」と回答した受講者が、どのような言葉を、特に記述していたかを見ることができる。

「a. とてもそう思う」と思った受講者は、他の回答をした受講者と同じような記述をしており、特に特徴的な言葉はなかった。「b. そう思う」と答えた回答者は、もっとも数多く、特徴的な言葉を記述していた。「c. 少しそう思う」と回答した教員は、「打ち込む」という言葉のみが特徴的であった。「e. そう思わない」と答えた回答者は「スマホ」という言葉を記述していたことがわかる。「d. あまりそう思わない」「f. まったくそう思わない」と答えた回答者はいないため、示されていない。「空白・エラー」の回答者は「授業」という言葉を書いていた。

ここから分かることは、今後も受講してみたいと思った教員ほど、積極的にその有用さを書き込み、希望しない教員のみ、「スマホ」という ICT 機器を書いていたことがわかる。

多重対応分析

12. ウェブクラスでのeポートフォリオを活用した研修・講習は、今後も、受講してみたいと思う。 図 50.



傾向と分析

多重対応分析により、外部変数ありの共起ネットワークとは、数理モデルが違いますが、ここでも、質問項目 12「ウェブクラスでのeポートフォリオを活用した研修・講習は、今後も、受講してみたいと思う。」に対する回答毎に、どのような特徴的な言葉を書いていたか、確認することができる。

右下に単語が密集しているのがわかる。そこに「a. とても思う」「b. そう思う」「c. 少し思う」がある。それゆえ、この質問項目については、「a. とても思う」「b. そう思う」と答えた回答者が、もっとも数多く、特徴的な言葉を記述していたことがわかる。「e. そう思わない」と「エラー・空白」の近くには何も言葉が配置されていない。また、「d. あまりそう思わない」「f. まったくそう思わない」と答えた回答者はいないため、図上には示されていない。概ね、前頁の分析結果と同じ結果になっていると見ることができる。

第 4 章

教育プログラムの評価 分析結果の考察

第3章において、「英語教員研修 e ポートフォリオ開発検討委員会による意識調査」の結果を示し、傾向を探り、分析を行った。この章では、その分析をもとに考察を加える。

今回のアンケート調査は、山形市小学校教育研究会外国語部会と連携した、第3回目の研修後に実施したことや（研修会自体は、一般に広く公開しており、中学校の教員も参加していた）、認定講習も小学校教員向けであったため、9割を超える回答者が小学校勤務という結果が出た（質問1）。（本来であれば、中学校・高等学校の教員からも回答を得られればなおのことよかったが、中学校・高等学校の教員に関しては、具体的な記述例として、第2章で掲載した。）。

世代別の構成比を見ると、30代、40代、50代がそれぞれ3割程度、20代が1割を占めていた（質問2）。したがってこのアンケート調査では、小学校の現場である程度の経験を積んだ、小学校外国語・外国語活動に対する関心が高く、この科目に対応する必要性を感じている教員からの回答を得ることができたと考えられる。また、40代、50代が合わせて6割程度であるので、学年主任や管理職など、指導的立場にある教員の回答も含まれている可能性があるかもしれない。

研修の内容や形態に関する質問（質問3～6）に対する回答からは、ほぼすべての回答者が、英語や英語教育に関する理論的な事柄よりも、明日の授業からでもすぐに使える実践的テクニックを学びたいと考えており（質問3）、また、座学よりも授業参観やワークショップなど、実際の授業に近い形態での研修を望んでいることが分かる（質問4）。これは、小学校での英語教育をどのように行ったらよいのか、現場の教員が対応に苦慮しており、実用的な授業法を切実に求めていることを示していると考えられる。ただし、2割弱の回答者は座学に対して拒否感を抱いておらず、9割弱の回答者が学問的理論も学びたいと思っている（質問6）。これらを考慮すると、実用的な教授法や教材を実践的に学ぶことを中心に、適宜、理論的背景についての理解も深めていけるような研修の場が求められていると言える。質問5は「指導案の書き方、CAN-DO リストの作成、活用の仕方、評価方法」という、授業の準備や評価に関する研修を望んでいるかどうかを問うものだが、9割の回答者が質問に対して肯定的な回答をしている。これは、評価を伴う正式な教科として英語を位置づけた新学習指導要領が全面実施される前に、新たに対処すべき事柄に対して不安を抱えている教員が多いことと同時に、そうした不安を克服するために学ぼうという前向きな姿勢を持つ教員が多いことを示している。

理論的な事柄も学びたいという回答者が大勢を占める一方で、実際に求められている研修は実践的なテクニックを学べる場であるという結果は、回答者の勤務環境に原因があるかもしれない。ほぼすべての回答者が、「研修の必要性を感じているものの、校務多忙で受けられない」（質問7）と回答している。教員の多忙さに関しては「働き方改革」の流れもあり、喫緊の課題として取り組まなければならない事項であるように思われる。ただし、そのような中でも、多忙であるにもかかわらず、多くの回答者は研修を受ける意欲を失ってはいない点である（質問8）。実際、年間に参加した研修の平均回数を問う質問では（質問9）、9割を越える回答者が

複数回参加しており、5 回以上の回答者は 3 割を越えている。多忙を極めるにもかかわらず、何とかやりくりして研修に参加している教員が多いことが読み取れる。すべての回答者が、「今回の研修・講習を受けて、得られるものがあつた」と感じている（質問 10）点も、今後につながるものであると考える。

WebClass での e ポートフォリオの有効性を問う質問（質問 11）と、e ポートフォリオを活用した研修・講習への参加意欲を問う質問（質問 12）に対しては、約 8 割の回答者が肯定的な回答をしている。これは、図 35 のクロス集計の結果からも、一目瞭然であつた。有効性や必要性について一定の認識を得られたと言える。

しかし、同時に、この質問 11 と質問 12 の 2 つの質問に突出して、無回答が一定数、存在した。他の質問には、見られなかった傾向である、それゆえ、この点に注目した。回答結果の違いは、当然ながら、考え方の違いに由来する。考え方の違いはいろいろなものに起因するが、一般論として、ゼネレーションギャップであることが多い。それで、その原因を探るべく、年齢（質問 2）と質問 11、年齢（質問 2）と質問 12 のクロス集計を行なったところ、ベテランの教員に、無回答が集中していたことが明らかになった。加えて、消極的な回答をした教員が上の年代に多かったことも、明らかになった。

この原因を探るため、質的・探索的調査である、アンケートの自由記述の結果を精緻に分析した結果を踏まえ、考察を行なった。その結果、クロス集計の結果と、特に「共起ネットワーク」図と「共起ネットワークの固有ベクトル中心性」の図の分析結果から明らかになったのは、教員の ICT リテラシーの低さであつた。これをさらに掘り下げ、「年代を外部変数とした共起ネットワーク」図ならびに「年齢を加味した多重対応分析」から見た際、若い世代よりも、特にベテラン世代の教員が困難を感じていることが浮き彫りになった。

実は、この点は、このアンケート調査とは別のことであるが、今回の研修を進めていく上で、もっとも大きな問題となったことでもあつた。例えば、相互評価やルーブリックを実施しようとしたが、ICT 機器の扱いに慣れていないゆえなのか、パソコン・タブレット・スマートフォンの電子機器の操作に時間を取られ、遅滞するような現象が時折見られた。それゆえ、そのような折には、状況に応じて、受講者の記述を口頭でフロアに伝え、その場で共有するように試み、それをもとに、ディスカッションを行うようにして、簡単な相互評価を行うことで代替した。しかし、今後、さらに情報化社会が進展し、ICT が浸透し、データ・サイエンスや AI が教育現場に及んでくることを考えれば、この問題は、すぐにでも解決しなければならない喫緊の課題であると考ええる。

また、今回、この事業で本委員会が特別に企画した 3 回の研修と、県教委が主催する研修（認定講習）の両方を実施したが、e ポートフォリオの書き込みの観点から見た場合、圧倒的に、県教委が主催する研修（認定講習）の受講者の方が多かつた。これは、様々な要因が考えられるため、一概には言えないが、今回の取り組みは、大学と県教委が連携したものであるが、やはり教員研修の主体はあくまで教育委員会にあることを再認識させることとなった。今回の結果を踏まえるならば、大学等が主催した研修会に教育委員会が連携するという形よりも、一例としては、教

育委員会が通常、実施している教員研修に大学が協力をして、e ポートフォリオを上手く組み込んでいくのが、もっとも効果的な形であるように思われる。今後、これを念頭に置き、その関係性を踏まえつつ、いかに様々な課題をクリアして、実施していくかが、今後重要になっていくと思われる。

今回の取り組みは、e ポートフォリオに関する取り組みであるが、ポートフォリオは、履歴が大きな意味を持つ。したがって、このような履歴を蓄積していくことが、肝要であるため、いかに、今後、継続的に、e ポートフォリオを活用した教員研修を行なっていくかが重要になってくると思われる。その意味において、e ポートフォリオを活用した教員研修は、単発的なものではなく、長く長期的に続けていってこそ、意味を持つものであると考える。

いずれにしろ、今回のアンケート調査から、研修に対して概ね肯定的な反応を得られたゆえ、一連の研修の受講者は、e ポートフォリオを活用した英語教員研修に対して、前向きに捉えていると理解できた。つまり、第二言語習得論に基づく、新しい英語学習法・指導法を理解し、さらなる学びを得ようとする意欲を確認することができたのである。その意味において、山形県教員「指標」のうち、「教師としての専門性の構築・専門教科の指導力強化」にある「29 英語教育や道徳教育、人権教育、環境教育、国際理解教育など、今日的な教育の動向を把握し学校全体に広めることができる」という目標を達成できた、もしくは近づくことができたと考える。

第 5 章

教育プログラムの評価 検証
これからの e ポートフォリオを
活用した英語教員研修

第3章で、「英語教員研修 e ポートフォリオ開発検討委員会による意識調査」の分析結果につき、考察を加えた。この章では、それを基に、成果目標として掲げた以下の3点が果たされたかどうか、検証を行うこととする。

本調査研究の成果目標は、次の3点である。

- ① 新たな教育課題に対応する教員の専門的資質・能力の向上
- ② 安価な情報システムによる、e ポートフォリオ構築のモデル・ケースの提示
- ③ 大学と県教育委員会による、研修の一体化連携・協働の在り方・モデルの創出

① 新たな教育課題に対応する教員の専門的資質・能力の向上

激しく変わりつつある21世紀において、従来の教育方法・学習方法では対応が難しい状況が生じているが、それは教員が研修する環境においても同様である。すなわち、「創造的な課題発見・解決力」を育む学びへ教員自身が、その学びにおいて、シフトする必要があると考えられる。

そのためには、学び方を変える必要があり、具体的には、主体的に学習し、学習履歴を保存・管理することが求められる。さらに、その内容を管理職と共有することにより、メンター（管理職）から適宜、指導とアドバイスを受け、教員自身が、学びを深めると同時に、将来への展望へとつなげていくことになる。

これにより、不測の事態が生じた際も、必要な知識を集め、適切な判断を下し、課題解決をはかる力を育てることにより、柔軟に対応できる力を学んでいくことになる。

今回の取り組みでは、参加した教員の多くが、今後も e ポートフォリオを活用した学びを続けてみたい、という意欲を示しており、この取り組みは非常に価値のあるものであったことが検証できたと言える。

さらに、e ポートフォリオへの書き込みの中で、興味深い記述があった。

ポートフォリオで自分の学びを蓄積すること、それがウェブ上で簡単にできることは、大変便利で教員の研修のアウトプットにもってこいだと思います。（復命書を作成して、校長印をもらって、などしていると、同僚に伝える暇もなくなります。）その日のうちに、できるだけ早く振り返ることができるよう、次に研修の機会があれば、パソコンを持参するのもいいのかもしれない。

この記述は、教員が e ポートフォリオのようなシステムの存在を望んでいることの率直な気持の表われであると考えることができる。

このような今回の取り組みは、山形県教員「指標」のうち、「教師としての専門性の構築・専門教科の指導力強化」にある「29 英語教育や道徳教育、人権教

育、環境教育、国際理解教育など、今日的な教育の動向を把握し学校全体に広めることができる」という目標を達成、もしくはそれに近づける成果を挙げたものとする。この点は、本研究調査の結果を報告する報告会を開催した際、外部有識者の福島大学・佐久間康之教授から高い評価をいただいた。

② 安価な情報システムによる、eポートフォリオ構築のモデル・ケースの提示

上記の学びを踏まえた教員研修を実践に移すためには、膨大な履歴を保存し管理しなければならない。しかし、それが、これまでは、非常に難しかった。なぜなら、履歴を、紙ベースで保管するのであれば、膨大な量になり、保管することの困難さに加え、検索性が著しく低くなるからである。

この点につき、昨今、通信情報技術の発展により、情報システムを構築することによって、電子的に保存・管理・参照が容易かつ簡便になった。加えて、その情報システムは、検索性や一覧性にも優れ、新たな発見につながる要素も含有している。このような情報システムとして、eポートフォリオを構築する必要性が高まっている。

しかし、そのような情報システムはおしなべて、設置に費用がかかることに加え、維持にもコストがかかる。さらに、そのシステムを誰が管理するか、という問題も孕んでいる。

そこで、これらの問題を解決する方法として、現在、ほとんどの大学で導入されている、LMS(Learning Management System)を活用する方法を、本事業で提案した。情報システムは、すでに設置してあるため、設置・維持の費用はかからない。既存のシステムであるゆえ、すでに管理者が存在するため、システムを管理する人を誰にするかという問題も生じない。その意味において、非常に安価に教員研修のためのeポートフォリオの構築が可能となった。

この点につき、本調査研究では、すでに本学において導入済みである、日本データ・パシフィック社が提供する「WebClass」を活用した。今回は、後述する問題点を抜きにすれば、極めて、効果的に、研修を進めていくことができた。それは、本調査研究が極めてコスト・パフォーマンスに優れていることや、それでいて、上記のように、多くの教員が、eポートフォリオで、さらに学び続けることを希望していることも考慮するなら、極めて価値のある取り組みであったと言える。

③ 大学と県教育委員会による、研修の一体化連携・協働の在り方・モデルの創出

この事業は、山形大学と山形県教育委員会が連携して、推進した。大学教員と山形県教育委員会の担当者による「英語教員研修 eポートフォリオ開発検討委員会」を設置し、山形大学から大学側の意見、山形県教育委員会からは県教委側からの意見を出し合い、双方の意向を踏まえた、システム設計と構築を行った。

その際、現職教員に対する質問紙調査を実施し、その内容を参考にしつつ、先行する事例として、大阪府教育委員会ならびに大阪教育大学を訪問調査し、その結果を開発に反映させた。大阪府教育委員会からは、膨大かつ詳細な教員研修の際に活用するポートフォリオを教示していただき、たいへん参考になった。大阪教育大学では、教員免許を取得する際の教育実習などに、e ポートフォリオを活用しており、その取り組みに学ぶべきことが多かった。その二つの訪問調査で得たことを、今回の調査研究に十二分に反映することができた。

今回、大学と教育委員会が持つリソースを出し合い、双方にないものを補完し合うことができ、非常に意義のある事業を遂行することができた。この取り組みは、双方がそれぞれのリソースを、建設的に、供出し合うことによって初めて、効果を発揮する。今回の取り組みについて、現場の教員からの好意的な反応を踏まえるなら、大学と教育委員会の協力関係は、極めて、効果的に発揮されたものとする。

次に、今後の展望について、考えることとする。

上で述べたように、この取り組みは極めて価値ある取り組みであることが明らかになったが、その一方、今後、取り組んでいくべき点が、2つ、あるように思われる。

すでに前章で触れたが、まず、1つは、教員の ICT に対するリテラシーの低さ、である。それは、考察でも触れたが、e ポートフォリオ以前に、そもそも、ウェブサイト適切にログインできない教員や、文字を入力することに困難を感じている教員も多々見られた。確かに、デジタルネイティブの若い世代に比べ、ベテラン世代の教員にとっては、困難が伴うものであることは十分に理解できることであるが、今後、情報化社会はさらに進み、間違いなく、データ・サイエンスや AI が教育現場に浸透していくことを考えれば、この点は、乗り越えていかなければならない問題であると言える。そもそも本来、ICT は、教員の日頃の授業や校内業務の負担を軽減してくれるものとして活用されていくべきものであるが、逆に負担感を感じているように思われる。今後の教育現場を取り巻く状況を鑑みるに、働き方改革の流れと相まって、もっと積極的な取り組みが求められるように思われる。

2つ目としては、今回の e ポートフォリオを活用した英語教員研修をどのように、普段の教員研修の中に位置付けていくか、という問題になると思われる。すでに述べたように、通常の県教委が実施する教員研修において、大学が e ポートフォリオに係る LMS などを提供する、という形での進め方がもっとも望ましいと考える。今回の取り組みで、英語教員研修に e ポートフォリオを活用することは、有効であることが明らかになったので、この成果をさらに発展させていくためにも、大学と教育委員会とで、さらに連携を深めて、どのような形で進めていくか、今後の取り組みに大いに期待したいと願っている。

いずれにしろ、今回の先進的な調査研究事業の成果としては、e ポートフォリオを活用した英語教員研修は極めて効果的であることが明らかになった。今後、この取り組みの

成果を様々な形で、いろいろな場に還元するとともに、継続していくことが重要である
と考える。

参考文献

- 足立悠(2019).『機械学習のための「前処理」入門』東京：リックテレコム
- 愛知県教育委員会「中学校 外国語〔英語〕科 第2学年 第3学年 パフォーマンス評価の事例」愛知県教育委員会
<https://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/263096.pdf>
- 青森県教育委員会(2018).「小・中学生英語力向上推進事業 中学校外国語科 パフォーマンス評価実践ハンドブック」青森県教育庁学校教育課
https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kyoiku/e-gakyo/files/gaikokugo_performance_handbook.pdf
- 荒木史子(2014).『外国語コミュニケーション力に情動が及ぼす影響 CEFR 自己評価に基づく分析から』広島：溪水社.
- 浅野享三(2013).「計量テキスト分析から考察する内容理解を促進する音読指導」中部地区英語教育学会「紀要」42. 61-68.
- CEFR-J <http://www.cefr-j.org/cefrj.html>
- Council of Europe. (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Strasbourg: Cambridge University Press.
- 越中康治 高田淑子, 木下英俊, 安藤明伸, 高橋潔, 田幡憲一, 岡正明, 石澤公明 (2014)「テキストマイニングによる授業評価アンケートの分析 ―共起ネットワークによる自由記述の可視化の試み―」『宮城教育大学情報処理センター研究紀要～COMMUE～』22. 67-74.
- 越中康治、目久田純一(2017).「放課後児童クラブにおける高学年児童の受け入れに対する認識―テキストマイニングによる自由記述の分析から―」『宮城教育大学情報処理センター研究紀要～COMMUE～』25. 15-24.
- 『英語教育』2012年10月増刊号 東京：大修館書店
- 『英語教育』2019 10 Vol.068 No.10 技能統合の要「読解力」を考える ポートフォリオ活用のおすすめ 大修館
- 富士通マーケティング 自己分析(アセスメント)型「e ポートフォリオ」システム構築事例 学生による学修自己評価を主体とした、学生、教員双方の「気づき」を促進
 公立大学法人 大阪府立大学 様
<https://www.fujitsu.com/jp/group/fjm/case-studies/osakafu-u/>
- 福島県猪苗代町教育委員会 福島県教育委員会委託事業(文部科学省再委託)平成26年度 英語指導力向上事業 指導と評価改善による教師の指導力向上及び生徒の英語力の向上 報告書.
- 福島県教育委員会 平成26年度「英語指導力向上事業」報告書.
- 福島県教育委員会 平成27年度「英語指導力向上事業」報告書.
- 樋口耕一「掲示板」
http://www.koichi.nihon.to/cgi-bin/bbs_khn/khcf.cgi?no=2354&mode=allread
- 樋口耕一「KH Coder」 <http://khcoder.net>
- 樋口耕一 KH Coder FAQ Index 外部変数について 外部変数とは何ですか?
<http://khcoder.net/FAQ.html#ov1>
- 樋口耕一「KH Coder の本」 <http://khcoder.net/book.html>

- 樋口耕一(2017).「計量テキスト分析およびKH Coder の利用状況と展望」『社会学評論』68. 3. 334-350.
- 樋口耕一「R を用いた多変量解析と可視化」 http://kncoder.net/scr_r.html
- 樋口耕一(2014).『社会調査のための計量テキスト分析ー内容分析の継承と発展を目指してー』京都：ナカニシヤ出版
- 樋口耕一「チュートリアル & ヒント」 <http://kncoder.net/tutorial.html>
- 本多尚子(2017).「日本人学生と留学生との間の異文化交流ー異文化コミュニケーション授業を対象としたテキストマイニング分析」『日本英語英文学』27. 25-53.
- 細川英雄 西山教行編(2010).『複言語・複文化主義とは何か ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ』東京：くろしお出版 リテラシー叢書 01
- 飯塚太郎、山中健太郎(2005).「ストループ課題のパフォーマンスと前頭シータ波の変動との関係について」『日本体育学会大会予稿集』56 03-23-55C12-03.
- 池田文人、鈴木誠(2007).「バカロレア試験におけるパフォーマンステスト導入の背景(海外における理科教育におけるパフォーマンス評価の実施状況とその課題, 自主企画課題研究, 転換期の科学教育)」『日本科学教育学会年会論文集』31 2B1-M4
- 石田基広、小林雄一郎(2013).『R で学ぶ日本語テキストマイニング』東京：ひつじ書房
- 石川祥一、西田正、斉田智里(編)(2011).『英語教育学体系第13巻 テスティングと評価 4 技能の測定から大学入試まで』東京：大修館書店.
- 岩佐由美、藤井千枝子(2017).「テキストマイニングで見た難病に対する関心とニーズ」『医療情報学』37. 3. 135-145.
- JF 日本語教育スタンダード
<https://jfstandard.jp/top/ja/render.do;jsessionid=2E52DD80A9F65953D9DF0E494EA06236>
- 金子淳(2017).『山形県の中学校・高等学校における、英語 CAN-D0 リスト普及化への対応をはかるカリキュラムもしくはプログラムの開発・試行』公益財団法人やまがた教育振興財団「教員養成に関する調査研究事業」報告書
- 金子淳(2018 a).「CAN-D0 リストの作成と活用に関する問題点とその対策 ―山形県の中学校・高等学校を中心に―」*TOHOKU TEFL JACET*, 7. 13-27.
- 金子淳、山口常夫、ジェリー・ミラー、武山史哉(2018 b).『山形県における、小学校英語教科化に対応するための実践的カリキュラムならびにプログラムの開発研究』やまがた教育振興財団「教員養成に関する調査研究事業」報告書
- 金子淳(2018 c).「第6章 英語教育と評価研究-学習到達目標(CAN-D0 リスト等)について-」西原哲雄編『英語教育と言語研究』東京：朝倉書店 135-159. 朝倉日英対照言語学シリーズ【発展編】4
- 金子淳(2018 d).「巻頭特集「評価」について～「学習到達目標(CAN-D0 リスト等)～」」『Fun with English』(英語教育情報誌) 啓林館 2018 年秋号
https://www.shinko-keirin.co.jp/keirinkan/tea/sho/fun/pdf/Fun_with_English05.pdf
- 金子淳、山口常夫、坂口隆之、ジェリー・ミラー、武山史哉(2019).『中高連携を踏まえた、英語授業におけるアクティビティとパフォーマンス・テスト開発に関する

る調査研究』 公益財団法人やまがた教育振興財団 平成30年度「教員養成に関する調査研究事業」調査報告書

Kaneko, J, Yamaguchi, T, Sakaguchi, T, Miller, J, Takeyama, F. (2019). A Survey of English as a Formal Subject in Elementary School in Yamagata Prefecture. *TELES Journal*. 39. 73-88.

Kaneko, J., Yoneno, K., Gloag, D., Yamaguchi, T. (in Press). A Study Assessing the Feasibility of Using Musio X AI Robots to Assist in English Studies at Elementary Schools: Text Mining Analysis and Considerations. *TELES Journal*, 40.

川西町教育委員会、金子淳(2019)「“ONE TEAM”で取り組む山形県川西町の英語教育改革」『英語教育』大修館書店 2020年1月号 30-31.

ケント、デリン(2012).『Mahara でつくる e ポートフォリオ入門』大沢真也、中西大輔、吉田光宏共訳 東京：海文堂出版

清田洋一編(2017).『英語学習ポートフォリオの理論と実践 自立した学習者をめざして』東京：くろしお出版

小林雄一郎(2018).『Rによるやさしいテキストマイニング』東京：オーム社

小林雄一郎(2018).『Rによるやさしいテキストマイニング 活用事例編』東京：オーム社

小林雄一郎(2017).『Rによるやさしいテキストマイニング [機械学習編]』東京：オーム社

小泉利恵・印南洋・深澤真(編)(2017).『英語テスト作成ガイド』東京：大修館書店.

近藤裕美子(2015).「教師ポートフォリオ作成ワークショップー自律的、主体的に学ぶ教師の支援を目指した教師研修のデザインー」国際交流基金日本語教育紀要 11. 113-125.

公益財団法人 日本英語検定協会 <http://www.eiken.or.jp/eiken/>

ライティングテストの採点に関する観点および注意点 (1級・準1級・2級)

http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/2016scoring_w_info.html

ライティングテストの採点に関する観点および注意点 (準2級)

http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/2017scoring_p2w_info.html

ライティングテストの採点に関する観点および注意点 (3級)

http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/2017scoring_3w_info.html

ライティング問題用教材「Dr. Write の英検3級ライティングテストに挑戦！」

http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/grade_3/pdf/DrWrite_grade3.pdf

黒橋禎夫(2019).『自然言語処理 (放送大学教材)』改訂版 東京：放送大学教育振興会.

串田紀代美(2014).「中上級学習者の文法に関する Can-do 形式シラバスの妥当性 自己評価型ポートフォリオと評価観点の構造分析ー」.『日本研究センター教育研究年報』アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター. 3. 1-30.

李在鎬編、石黒圭ほか(2017).『文章を科学する』東京：ひつじ書房

Martyniuk, W. (2011). *Aligning Tests with the CEFR: Reflections on using the Council of Europe's draft Manual*. Cambridge: Cambridge University Press.

松葉龍一、小村道昭編著、久保田真一郎(2018).『学生力を高める e ポートフォリオ 成功への再始動』東京：東京電機大学出版局

「平成 28 年度『英語教育実施状況調査』の結果について」

http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1384230.htm

「各中・高等学校の外国語教育における『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標設定のための手引き」

http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1332306.htm

「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告（概要）～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」平成 26 年 9 月 26 日

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/1352460.htm
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352463.htm

小学校学習指導要領

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf

小学校学習指導要領 比較対照表

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/05/30/1384661_4_1_1.pdf

小学校学習指導要領解説

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1387014.htm

生徒の英語力向上推進プラン

https://www.google.co.jp/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=2&ved=0ahUKEwjVqePAw6DUAhWBupQKHYqBBbcQFggoMAE&url=http%3A%2F%2Fwww.mext.go.jp%2Fa_menu%2Fkokusai%2Fgaikokugo%2F__icsFiles%2Fafielde%2F2015%2F07%2F21%2F1358906_01_1.pdf&usg=AFQjCNE3xMxYkLMvXGAc3sJWH_SZHEk-Xw&cad=rja

中学校学習指導要領

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1384661_5.pdf

中学校学習指導要領 比較対照表

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1384661_5-1.pdf

中学校学習指導要領解説

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1387016.htm

平成 27 年度「英語教育実施状況調査」の結果について

http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1358566.htm

平成 28 年度「英語教育実施状況調査」の結果について

http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1384230.htm

平成 28 年度「英語教育実施状況調査」（中学・高等学校関係）

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2017/04/07/1384236_01_1.pdf

平成 29 年度「英語教育実施状況調査」の結果について

http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1403468.htm

【集計結果】都道府県別調査結果

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/___icsFiles/afielddfile/2018/04/06/1403469_06.pdf

文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成28年度報告書 東京学芸大学 平成29年3月20日

<http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/report/index.html>

物井尚子, 折原俊一, Marzan Maria, Horne Beverley, 西垣知佳子, 石井雄隆(2017). 「パフォーマンス・テストと連動した自己評価の可能性」『千葉大学教育学部研究紀要』66 1 97-104.

モロウ, キース(2013). 『ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)から学ぶ英語教育』和田稔他訳 東京: 研究社

村上京子(2009). 「外国人就労者のための日本語`Can Do` statements の開発 パフォーマンス・テストによる妥当性の検討」名古屋大学留学生センター『言語教育評価研究』1. 21.

中村優治(2005). 「二つのパフォーマンステストの果たす役割(英語教育法)」『国際基督教大学学報『教育研究』47 169-176.

中嶋剛(2013). 「進路選択における潜在意識の研究-大学生の自由記述回答の分析」『千葉経済大学 千葉経済論叢』48. 23-49.

那須川哲哉(2006). 『テキストマイニングを使う技術/作る技術 基礎技術と適用事例から導く本質と活用法』東京: 東京電機大学出版局

根岸雅史「CAN-DO リストは日本の英語教育に何をもたらすか」文部科学省－ブリティッシュ・カウンシル共催シンポジウム CAN-DO リストを活用した学習到達目標の設定と評価～CEFRが日本にもたらす示唆.

https://www.britishcouncil.jp/sites/default/files/ji_diao_jiang_yan_2_can-do_risutohari_ben_noying_yu_jiao_yu_nihe_womotarasuka.pdf

根岸雅史(2014). 「CAN-DO リストを活用した学習到達目標達成状況の評価」『英語教育学の今 理論と実践の統合』全国英語教育学会 pp. 208-211.

Negishi, M, Takada, T, and Tono, Y. (2013). A progress report on the development of the CEFR-J. In Evelina D. Galaczi and Cyril J. Weir (Eds.) Studies in Language Testing 36, Cambridge: Cambridge University Press, 135-163.

日本データパシフィック株式会社「e ポートフォリオ・コンテナ」機能 | e ポートフォリオの概要 | <https://www.datapacific.co.jp/eportfolio/>

西岡加名恵他(2013). 『教職実践演習ワークブック ポートフォリオで教師力アップ』京都: ミネルヴァ書房

Noijons, J, Beresova, J, Breton, G, and Szabo, G. (Eds.) (2011). *Relating language examinations to the Common European Framework for Languages: Learning, teaching, assessment (CEFR) Highlights from the Manual*. Graz, Austria: Council of Europe Publishing.

North, B. (2014). *The CEFR in Practice*. English Profile Studies 4. Cambridge:

Cambridge University Press.

小川賀代、小村道昭(2012).『大学力を高める e ポートフォリオ エビデンスに基づく教育の質保証をめざして』東京：東京電機大学出版局)

大場渉(2009).「メンタルプラクティスが習熟後のパフォーマンスに及ぼす影響」『体育学研究』54. 2. 437-448.

大湊佳宏(2013).「「教室内での人間関係が英語対話活動のパフォーマンスに与える影響について」中部地区英語教育学会第42回(岐阜)大会」『中部地区英語教育学会紀要』42 39-44.

大阪府教育委員会 小学校初任者研修 7. その他(マイポートフォリオ/OSAKA 教職スタンダード)

http://wwwc.osaka-c.ed.jp/category/training/h29/syo/syo_syonin.html

大阪教育大学 教育実習での学びをポートフォリオに

https://osaka-kyoiku.ac.jp/_file/kyomu/kyokikaku/jissenn_ensyu.pdf

欧州評議会言語政策局(2016).『言語の多様性から複言語教育へ ヨーロッパ言語教育政策策定ガイド』山本冴里訳 東京：くろしお出版

佐藤一嘉編著(2014).『ワーク&評価表ですぐに使える! 英語授業を変えるパフォーマンス・テスト(授業をグリーンと楽しくする英語教材シリーズ) 中学1年』東京：明治図書出版

佐藤一嘉編著(2014).『ワーク&評価表ですぐに使える! 英語授業を変えるパフォーマンス・テスト(授業をグリーンと楽しくする英語教材シリーズ) 中学2年』東京：明治図書出版

佐藤一嘉編著(2014).『ワーク&評価表ですぐに使える! 英語授業を変えるパフォーマンス・テスト(授業をグリーンと楽しくする英語教材シリーズ) 中学3年』東京：明治図書出版

佐藤一嘉「英語授業も生徒も激変する「パフォーマンス・テスト」を取り入れよう! - 著者インタビュー」明治図書オンライン「教育 zine」

<https://www.meijitosh.co.jp/eduzine/interview/?id=20140537>

白井恭弘(2008).『外国語学習の科学 第二言語習得論とは何か』東京：岩波書店.

白井恭弘(2012).『英語教師のための第二言語習得論入門』東京：大修館書店.

主体的学び研究所編(2015).『主体的学び 特集アクティブラーニングとポートフォリオ』東京：東信堂

末吉美喜(2019).『テキストマイニング入門 Excel と KH Coder でわかるデータ分析』東京：オーム社

牛澤賢二(2018).『やってみようテキストマイニング 自由回答アンケートの分析に挑戦!』東京：朝倉書店

田中京子(2014).「KH Coder と R を用いたネットワーク分析」『久留米大学コンピュータジャーナル』28. 37-52.

土持ゲーリー法一(2009).『ラーニング・ポートフォリオ 学習改善の秘訣』東京：東信堂

渡慶次正則・Norman Fewell・津嘉山淳子・名城義久(2016).「CEFR-Jに基づいた Can-Do

- ディスクリプタの信頼性と相関関係の基礎的調査 M 大学教養英語の事例」『名桜大学総合研究』25: 13-23.
- 東京都教育委員会「パフォーマンステストリーフ」出力用.indd - 東京都教育委員会
http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/school/document/global/files/junior_high/english2.pdf
- 投野由紀夫編(2014).『英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック CAN-DO リスト作成・活用』東京:大修館書店
- 牛澤賢二(2018).『やってみよう テキストマイニングー自由回答アンケートの分析に挑戦!ー』東京:朝倉書店
- ヴァンス, ウィリアム A(2009).『ドクター・ヴァンスの英語で考えるスピーキング』神田房枝訳 東京:ダイヤモンド社
- ヴァンス, ウィリアム A (2009).『ドクター・ヴァンスのビジネス・プロフェッショナルが使うパワー 英単語 100』神田房枝監訳 東京:ダイヤモンド社.
- 渡部真喜子「CAN-DO リストを活用した英語科授業の実践 福島県猪苗代町立東中学校」
<https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/contest/tkyoiku/no31/watanabe.pdf>
- 山口常夫、金子淳(2019). 「パフォーマンステストと「評価」ー中学校の現行学習指導要領の観点から」『Fun with English』(英語教育情報誌) 啓林館 2019 年春夏号 14-15.
- 山内長承(2017).『Python によるテキストマイニング入門』東京:オーム社
- 山西博之「パフォーマンステスト(ライティング)の測定と評価」関西大学外国語学部
http://www2.kansai-u.ac.jp/jart2015/files2015/symposium/s1_3.pdf
- 横山千晴「パフォーマンス課題とルーブリックで発信力を問う英語授業ー1 年英語科 SP2 道案内「留学生に佐賀大学 周辺マップを作って紹介しよう」を通してー」佐賀大学文化教育学部附属中学校
- 米崎里、多良静也、佃由紀子(2016).「小学校外国語活動の教科化・低学年化に対する小学校教員の不安ーその構造と変遷ー」*JES journal*. 16. 132-146.
- 吉島茂、大橋理枝他編訳(2014).『外国語教育Ⅱ 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』追補版 東京:朝日出版社
- 全国英語ディベート連盟 (HEnDA) <http://henda.global>

参考資料

英語教員研修
e ポートフォリオ開発検討委員会
による意識調査

英語教員研修 e ポートフォリオ開発検討委員会

による意識調査

この度、令和元年度 文部科学省委託事業「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」に採択されたことに基づき、2019 年秋に、山形大学主催、山形県教育委員会、山形市小学校教育研究会外国語部会、共催で英語教員の研修会を開催してきております。つきましては、もしよろしければ、以下の英語の教員研修に関する調査にご回答いただけますなら、幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

2019 年 11 月 1 日（金）

代表者 金子淳

山形大学 地域教育文化学部

上記をお読みいただき、ご同意いただけました場合は、お答えいただけますなら幸いです。ご同意いただけない場合は、回答をおやめになられてもだいじょうぶです。回答しなくても何ら不利益はございませんので、ご安心なさってください。

お読みになられて、同意される場合は、以下に○を、つけてお進みになられて下さい。

1. 同意します。 2. 同意しません。

以下の質問項目のうち、当てはまるものに○をつけて下さい。

1. 現在勤務している学校の校種を答えて下さい。

1. 小学校 2. 中学校 3. 高等学校 4. 特別支援学校
5. その他 ()

2. 年齢を答えて下さい。

1. 20 代 2. 30 代 3. 40 代 4. 50 代
5. 60 代

3. 明日の授業に、すぐ使える実践的テクニックを学べる研修が望ましい。

1. とてもそう思う。 2. そう思う。 3. 少しそう思う。
4. あまりそう思わない。 5. そう思わない。 6. まったくそう思わない。

4. 座学よりも、授業参観やワークショップなどの研修が望ましい。

- | | | |
|---------------|------------|----------------|
| 1. とてもそう思う。 | 2. そう思う。 | 3. 少しそう思う。 |
| 4. あまりそう思わない。 | 5. そう思わない。 | 6. まったくそう思わない。 |

5. 新学習指導要領が実施されるにあたり、指導案の書き方、CAN-DO リストの作成、活用の仕方、評価方法を学べる研修が望ましい。

- | | | |
|---------------|------------|----------------|
| 1. とてもそう思う。 | 2. そう思う。 | 3. 少しそう思う。 |
| 4. あまりそう思わない。 | 5. そう思わない。 | 6. まったくそう思わない。 |

6. 実践も大事であるが、きちんとした学問的理論も学びたいと思う。

- | | | |
|---------------|------------|----------------|
| 1. とてもそう思う。 | 2. そう思う。 | 3. 少しそう思う。 |
| 4. あまりそう思わない。 | 5. そう思わない。 | 6. まったくそう思わない。 |

7. 研修の必要性を感じているものの、校務多忙で受けられない。

- | | | |
|---------------|------------|----------------|
| 1. とてもそう思う。 | 2. そう思う。 | 3. 少しそう思う。 |
| 4. あまりそう思わない。 | 5. そう思わない。 | 6. まったくそう思わない。 |

8. 研修の必要性を感じているものの、受ける気持ちが起こらない。

- | | | |
|---------------|------------|----------------|
| 1. とてもそう思う。 | 2. そう思う。 | 3. 少しそう思う。 |
| 4. あまりそう思わない。 | 5. そう思わない。 | 6. まったくそう思わない。 |

9. これまで、一年に平均何回くらい研修を受けてきましたか。

- | | | | |
|-------|---------|-------|-------|
| 1. 0回 | 2. 1回 | 3. 2回 | 4. 3回 |
| 5. 4回 | 6. 5回以上 | | |

10. 今回の研修・講習を受けて、得られるものがあつた。

- | | | |
|---------------|------------|----------------|
| 1. とてもそう思う。 | 2. そう思う。 | 3. 少しそう思う。 |
| 4. あまりそう思わない。 | 5. そう思わない。 | 6. まったくそう思わない。 |

11. ウェブクラスでのeポートフォリオは、有用だと思った。

- | | | |
|---------------|------------|----------------|
| 1. とてもそう思う。 | 2. そう思う。 | 3. 少しそう思う。 |
| 4. あまりそう思わない。 | 5. そう思わない。 | 6. まったくそう思わない。 |

12. ウェブクラスでの e ポートフォリオを活用した研修・講習は、今後も、受講してみたいと思う。

- | | | |
|---------------|------------|----------------|
| 1. とてもそう思う。 | 2. そう思う。 | 3. 少しそう思う。 |
| 4. あまりそう思わない。 | 5. そう思わない。 | 6. まったくそう思わない。 |

13. 英語のウェブクラスでの e ポートフォリオを活用した教員研修について、よかった点、悪かった点も含めて、お考えをお聞かせ下さい。（自由記述）

ご協力をいただきまして、どうもありがとうございました。

2019 年度（令和元年度） 文部科学省委託事業
教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業
「テーマ3 校長及び教員としての資質の向上に関する指標と
研修の効果的な連動に関する研究」

委託事業成果報告書

山形県教員指標に対応した
英語教員研修 e ポートフォリオの構築

2020 年（令和 2 年）3 月

発行者（実施責任者）

山形大学

大森 桂

印刷 中央印刷

本報告書は、文部科学省による委託事業として、山形大学が実施した 2019 年度（令和元年度）「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続が必要です。